

札幌国際大学
地域・産学連携センター一年報
第7号

札幌国際大学
地域・産学連携センター

札幌国際大学
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報
第7号

目 次

<事業報告>

1. 令和4(2022)年度 浦河町・地域連携事業報告
[子育て支援分野] 公開講座①及び公開講座②学生企画運動遊びイベント、「幼児期からの学びの土台づくり事業」
朝地 信介・林 二士 pp1-8
2. 令和4(2022)年度 奨励研究 調査研究報告 [今金町]
大学発スポーツクラブのアウトリーチに関する実証的研究
佐久間 章・赤川 智保・平澤 芳明・本多 理紗
(協力)今金町まちづくり推進課..... [pp1-2], pp1-39, [p1]
3. 令和4(2022)年度 地域・産学連携センター共同研究 [北海道商工会議所連合会]
一般社団法人北海道商工会議所連合会 と人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書:
～卒業後職業観「なぜ我々は働くのか」についての研究～
平塚 彰
(協力)授業「キャリア形成論」担当教員: 椿 明美・原 一将・新谷 弥・樋原 智恵
..... pp1-10
4. 令和4(2022)年度 地域・産学連携センター事業報告 [札幌市清田区・北海道コカ・コーラボトリング(株)]
清田区、北海道コカ・コーラボトリング(株)との協働による「清田区オリジナルモクテルレシピ開発」
報告書:～ゼミ学生による地元の魅力発信のための地域貢献型モクテルの開発～
金庭 香理
(協力):札幌市清田区, 北海道コカ・コーラボトリング(株)
..... pp1-4
5. 令和4(2022)年度 地域・産学連携センター共同研究 [札幌市総務局国際部交流課、公財]札幌国際プラザ]
「留学生による外国人支援プロジェクト」官学連携報告書
—札幌市在住外国人を対象とした日本語力調査実施への協力及び札幌市やさしい日本語ガイドライン
作成に向けた準備— 金庭 香理・細野 弥恵・宇留野 健太・太田 真司(札幌市総務局国際部交流課)
(協同)札幌市総務局国際部交流課, 公財)札幌国際プラザ.....pp1-3

【2022(令和4)年度地域連携事業の目的】

〔子育て支援分野〕の取り組みとして、学生の保育技能向上に関わる課題解決型学習の成果発表の機会となる学生企画の「公開講座」と、子どもの学力・運動能力等の基礎力向上につながる「学びの土台づくり」講座を行う。また浦河町の保健衛生・福祉介護・子育ての人材誘致につなげる機会として、地域の特色や産業、就業環境への理解を深める。

【担当】

林二士 〔子育て支援分野〕公開講座① 学生企画運動遊びイベント／幼児期からの学びの土台づくり事業
朝地信介 〔子育て支援分野〕公開講座② 学生企画造形遊びイベント

【〔子育て支援分野〕公開講座①② 学生企画運動遊びイベント・造形遊びイベント】

◇日程：2023年2月8(水)・9(木)・10(金)

日時	スケジュール・場所		備考
12/21(水)			
12：15	浦河町・両ゼミ合同打ち合わせ	ZOOM	
2/8(水)1 日目			
10：30	荷物準備・ゼミごと打ち合わせなど	各教室	
11：30	バス配車・荷物積み込み	大学	
12：00	大学出発		休憩（新冠）
15：00	浦河町着・会場設営・両ゼミ合同リハーサル	文化会館	※リハはお互い先生役・子ども役で
18：00	AERU 着・チェックイン・夕食	AERU・レストラン	
2/9(木) 2 日目			
7：30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン	
8：40	出発		
9：00	文化会館着・準備	文化会館	
10：00	イベント①運動遊び（約 40 分）		
10：45	※必要に応じてトイレ休憩等		
10：50	イベント②造形遊び（約 45 分）		※作品は園へ移動
11：40	イベント終了・掃除		
12：30	昼食		
13：30	学生向け研修① 乗馬体験【全員】	乗馬公園	※大学手配バスで巡回
14：45	学生向け研修② 園舎見学【全員】	浦河フレンド森のようちえん	※大学手配バスで巡回
16：00	学生向け研修③ アイススケート体験【希望者】	浦河町スケートリンク	※大学手配バスで巡回
18：00	AERU 着・夕食	AERU・バーベキューハウス	
20：00	観光協会による町の魅力紹介	AERU	
2/10(金) 3 日目			
7：30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン	
8：40	チェックアウト・出発		
9：00	文化会館着・準備	文化会館	
10：00	イベント①② ※前日同様		※作品は園へ移動
11：40	イベント終了・撤収作業・掃除		
12：30	昼食		弁当（ぱんぱかぱん）
13：30	浦河町出発		休憩（新冠）
16：30	大学着・荷物降ろし・解散	大学	

◇会場：浦河町総合文化会館（浦河町大通 3 丁目 52 TEL0146-22-5000）

文化会館ふれあいホール（メイン会場）、和室 1・2・3（準備・控室）、第 3 研修室（学生控室）

◇参加学生：朝地ゼミ（造形遊びコース 15 名）・林ゼミ（運動遊びコース 10 名） 計 25 名

◇対象：2/9 浦河フレンド森のようちえん 5 歳児 24 名

2/10 夢の国幼稚園・保育園 5 歳児 29 名・雛菊保育園 5 歳児 7 名 計 36 名

◇担当：浦河町役場子育て医療課 小林課長、田村係長

◇移動：大型バス（60 人乗り）

◇宿泊：2 月 8～10 日（2 泊 3 日間）

うらかわ優駿ビレッジ AERU（浦河町西舎 141-40 TEL01462-8-2111）

◇費用：浦河町および札幌国際大学地域連携センター予算より支出

◇イベント実施前のコロナウィルス安全対策

※実施前の対策については、学科の実習時の事前準備に沿う。

※別紙【新型コロナ対応フローチャート（チェックシート）】参照

- ・参加者（学生・教員）のイベント 1 週間前（2/1～）からの検温・体調記録、行動記録を行う。
⇒ゼミごとに、出発前日（2/7(火)）に担当教員に報告する。
- ・2/8(水)（浦河への出発初日）の朝に各自で抗原検査を実施し、結果を担当教員に報告する。
- ・検温、体調チェック期間中に継続した発熱・体調不良があったり、イベント当日に発熱・体調不良がある場合は不参加。【相談・申告必須】

◇イベント開催時のコロナウィルス安全対策

- ・学生・参加者は不織布マスクを着用する。
- ・手指の消毒を徹底し、接触への対策をする。
- ・複数の子どもや学生が触れるものはこまめな除菌をする。
- ・集合や整列、移動する際には各人の距離をとるよう動線を工夫する。
- ・対応する学生ができるだけ入れ替わらない（接触を減らす）ように担当範囲を決める。
- ・制作の際は、使用場所をシートごとに区切り、シート 1 枚ごとの子どもの参加人数を制限するなどして、子ども活動の範囲を決める。
- ・使用する用具は一式ごとに分けて用意し、参加者同士の用具の共有を減らす。

◇イベント時以外（移動・宿泊・食事）のコロナウィルス感染予防対策

- ・【三密回避、マスク、消毒】の徹底。
- ・原則として北海道の警戒ステージ（レベル 3）に合わせた感染予防対策と、大学の対面授業実施と同様の感染予防対策、および使用する各施設の安全対策・安全基準に沿う。

◇イベント中止判断の検討

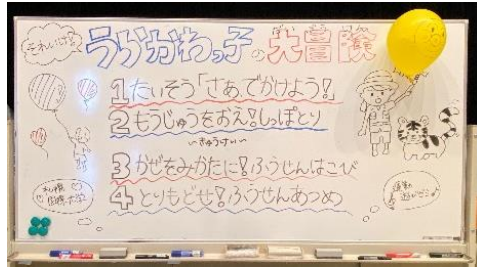
※以下の状況となった場合は、浦河町・国際大学担当者双方で実施判断を検討し方針を決定する。

- ・北海道の警戒ステージ 4 または緊急事態宣言に相当する状況になった場合。
- ・イベント前に大学の学生間で集団感染が発生した場合、および浦河町の関係者間で集団感染が発生、または町内で感染状況が拡大している場合。

◇公開講座① 学生企画運動遊びイベント『それいけ！！うらかわっこの大冒険』 【約 40 分】

冒険遊びをテーマにして、仲間と協力して楽しく体を動かし遊びました。冒険遊びごとにアイテムをゲットし、謎解きのパズルを完成させました。

(1) 2/8(水) 準備・リハーサル



(2) 2/9(木)・10(金) イベント実施

当日主な内容は以下の通り。

①入室とともにチーム分けをし、3色のチームを組んでおく。

①冒険に備えて準備体操

2020年度ゼミ生が作成した「さあ！でかけよう」に合わせて準備体操をする。参加する園には、2020年にファイターズB☆Bと一緒に撮影した体操の動画を配布し、事前に体操を体験しておいてもらい学生と一緒に体操を楽しんだ。

②猛獣を追え！しっぽとりゲーム

しっぽを付けた猛獣（学生）から、各チームで力を合わせて猛獣のしっぽをとるゲームをした。初めに各自1本ずつしっぽを取るゲームをしてルールを確認した後、自分のチームカラーのしっぽを猛獣から取るゲームへと展開された。ゲーム後にはミッションをクリアしたという設定で謎解きパズルのピースを獲得した。

③風を味方に！風船運び

チーム内で二人一組になり広げた新聞に風船を乗せ運ぶゲームをした。コースの途中で障害物（邪魔をする学生）をよけながら、二人で力を合わせ、風船を運ぶ競争をした。ゲーム後には謎解きパズルのピースを獲得した。

④とり戻せ！風船集め

初めにチームカラーの風船を集めるゲームをしてルールを確認した後、次に風船に描かれているマークを手がかりにマーク集めのゲームへと展開された。ゲーム後には謎解きパズルのピースを獲得した。

⑤謎解きのパズルの完成

各ゲームで獲得した謎解きパズルのピースを集め、パズルを完成させ謎を解き、大冒険の終わりに宝物を獲得した。



◇公開講座② 学生企画造形遊びイベント『ぺたぺた むりもり おえかきパーティー』 【約 45 分】

大きな紙と絵の具を用意し、子どもと学生の協同で、色々な道具を使ったり全身を使ったりして絵を描いて遊ぶ企画を実施した。

(1) 2/8(水) 会場設営・リハーサル



(2) 2/9(木)・10(金) イベント実施

当日の主な内容・手順は以下の通り。

- ・事前に大きいサイズの画用紙（6枚分／230×240cm）を用意し、5か所に配置する。
- ・学生からイベントの内容と遊び方（制作の仕方）を説明する。
- ・汚れ防止のカップなどを着用する。
- ・子どもを5グループに分け、それぞれに学生が3人ずつ付く。
- ・5か所の大きい紙にグループごとに分かれ、子どもが使いたい用具と絵の具の色を選んで制作を進める。学生は制作の補助を行う。（運動ゼミ学生にも協力してもらう）
- ・あと片付け。作品はその場で乾燥させる（⇒園に飾る）。
- ・完成した作品の前で、子どものグループごと、子どもと学生などで集合写真を撮影する。



◇学生向け研修

浦河町の地域の特徴や療育の取り組みへの理解を深めるため、浦河町が『乗馬療育・引き馬体験』『園舎見学（浦河フレンド森のようちえん）』『アイススケート体験』『観光協会による町の魅力紹介（イーグルウォッチング・星空観察講座）』を準備し、学生が参加した。

(1)浦河町乗馬公園乗馬療育・引き馬体験



(2)園舎見学（浦河フレンド森のようちえん）



(3)アイススケート体験



(4)観光協会による町の魅力紹介

（イーグルウォッチング・星空観察講座）



【[子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業】概要

報告者：林 二士

全国的に子どもの体力や運動能力の低下が指摘される中、北海道の子どもの体力・運動能力は全国平均を下回っている。また全道における日高管内の学力低下や、体力・運動能力の低下は著しい傾向にあり、浦河町においても深刻な状況となっている。浦河町ではその改善策として、子どもたちの学びに向かう姿勢や意欲、基礎体力の向上を目指すことを目的に、平成30年度より「幼児期からの学びの土台づくり事業」を開始した。この事業では「幼児の運動遊び」を契機とし、町内の幼稚園・保育所の幼児の運動能力調査、町内の保育士向けの講座、親子向けの講座、子育てサークルへの講座などを展開し、今年度で5年目の事業となる。

*札幌国際大学 地域・産学連携センター年報（WEB）第5号 浦河町・札幌国際大学地域連携事業報告(令和2年度) 参照

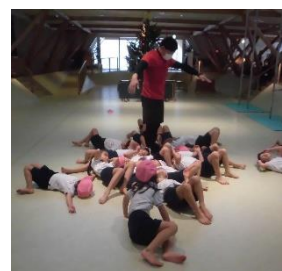
*札幌国際大学 地域・産学連携センター年報（WEB）第6号 浦河町・札幌国際大学地域連携事業報告(令和3年度) 参照

昨年と同様に新型コロナウイルス感染予防対策を施し、10・11月には各園で行われている幼児運動能力調査、12月には荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）をお呼びし、保育士や児童館職員向けの実技講座、親子向けの講座を開催した。また各園へ伺い運動遊びのアドバイスや指導実践を実施した。

- ・10・11月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5歳児対象 約200名）
- ・12/13 保育士向け実技講座「遊びごころを子どもたちに伝えよう」を開催
- ・12/14 親子向けの講座「親子ふれあい遊び」、児童館の職員向け実技講座の開催
講師：荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）



- ・12/14 夢の国幼稚園・保育園運動遊び指導のアドバイス 講師：林 二士



- ・12/15 浦河フレンド森のようちえん 3・4・5歳児の運動遊び指導実践 講師：林 二士



【過年度事業内容】

◇2016(平成 28)年度

- ・ 4/15 協定締結（浦河町役場）
- ・ 6/25・26 [観光分野] 地域 PR プロジェクト 浦河かつめし・特産品販売（札幌国際大学）
- ・ 12/7・8 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇・ハンドベル合同公演（浦河町総合文化会館）

◇2017(平成 29)年度

- ・ 6/24・25 [観光分野] 地域 PR プロジェクト 浦河餃子羽根付き餃子丼・特産品販売（札幌国際大学）
- ・ 6/18 [スポーツ分野] 健康講座「肩こり解消！ストレッチング」（浦河町総合文化会館）
- ・ 2/6・7 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（認定こども園夢の国幼稚園・保育園、雛菊保育園）

◇2018(平成 30)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業

- ・ 8/1「子どもの体力や運動遊びについて 浦河の現状と課題」 浦河町生涯学習センター
町内保育士など関係者 25 名
- ・ 11/14「幼児の運動遊び」実技講座 浦河町ふれあい会館 町内保育士など関係者 25 名
- ・ 11/14・15「幼児運動能力検査」 浦河町ファミリーサポートセンター
町内保育所・幼稚園の 3 歳～5 歳児 220 名
- ・ 11/1 親子体操教室「家庭でできる運動遊び」 浦河町堺町体育館 町内在住の 3～5 歳児親子 30 組
- ・ 2/12 振り返りの講座 浦河町役場 町内保育士など関係者 25 名
- ◎2/12～14 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（東町保育所、東部保育所、荻伏保育所）

◇2019(令和元)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業

- ・ 7/10～24 運動遊びの巡回指導実践 町内幼稚園・保育所 6 か所
町内園・所 園児 保育士など関係者 30 名
- ・ 10・11 月「幼児運動能力調査」
町内保育所・幼稚園の 3 歳～5 歳児 220 名
- ・ 10/19 親子体操教室「家庭でできる運動あそび」 浦河町堺町体育館
町内在住の 3 歳～5 歳児がいる親子 30 組
- ・ 11/13 乳幼児向け教室（親に向けてミニ講習）
町内在住の 3 歳～5 歳児がいる親子 30 組
- ・ 2/18 振り返りの講座 浦河町役場 町内保育士など関係者 25 名
- ◎2/16～18 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（くるみ保育所、フレンド幼稚園）

◇2020(令和 2)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業

- ・ 10・11 月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5 歳児対象 229 名）
- ・ 2/17 振り返りの講座（浦河町役場） 保育士等 20 名
- ◎2/8～10 [子育て支援分野] 公開講座（浦河町総合文化会館）
 - ・ 公開講座① 学生企画運動遊びイベント『レッツ！エンジョイ！うらかわオリンピック』
 - ・ 公開講座② 学生企画造形遊びイベント『みんなでへんしん！わくわく隊！』

- ・対象 2/9 荻伏保育所・東部保育所 幼児約 25 名／2/10 東町保育所・フレンドようちえん 幼児約 30 名

◇2021(令和3)年度

◎〔子育て支援分野〕 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・10・11月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5 歳児対象 227 名）
- ・11/11 親子向けの講座「親子ふれあい遊び」、保育士向けの実技講座「遊び心を楽しもう」を開催
講師：荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）

◎2/8～10〔子育て支援分野〕 公開講座（浦河町総合文化会館） ※事業中止（当初予定の内容）

- ・公開講座① 学生企画運動遊びイベント『スーパーヒーロー！！BB（ビックボス）を救え』
- ・公開講座② 学生企画英語遊びイベント『えいごであそぼう～かず・からだ～（仮）』
- ・公開講座③ 学生企画造形遊びイベント 『Child Artist ～えのぐパラダイス～』
- ・対象 2/9 雛菊保育所 10 名・くるみ保育所 10 名・フレンドようちえん 15 名 4～5 歳児計 35 名
2/10 夢の国幼稚園・保育園 5 歳児 37 名

◇2022(令和4)年度

◎〔子育て支援分野〕 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・10・11月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5 歳児対象 約 200 名）
- ・12/13 保育士向け実技講座「遊び心を子どもたちに伝えよう」の開催
- ・12/14 親子向けの講座「親子ふれあい遊び」、児童館の職員向け実技講座の開催
講師：荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）

- ・12/14 夢の国幼稚園・保育園運動遊び指導のアドバイス
- ・12/15 浦河フレンド森のようちえん 3 才児・4 歳児・5 歳児の運動遊び指導実践

◎2/8～10〔子育て支援分野〕 公開講座（浦河町総合文化会館）

- ・公開講座① 学生企画運動遊びイベント『それいけ！！うらかわっこの大冒険』
- ・公開講座② 学生企画英語遊びイベント『ぺたぺた むりぬり おえかきパーティー』
- ・対象 2/9 浦河フレンド森のようちえん 5 歳児 24 名
2/10 夢の国幼稚園・保育園 5 歳児 29 名・雛菊保育園 5 歳児 7 名 計 36 名

令和 4(2022)年度 奨励研究 調査研究報告

大学発スポーツクラブのアウトリーチに関する実証的研究

札幌国際大学

目 次

I 研究概要	1
1 研究の背景及び目的	
2 研究組織・推進体制	
3 調査研究方法・スケジュール	
II アウトリーチによる活動概況及び成果と課題	3
1 幼児対象「ダンス教室」事業のアウトリーチ	
2 高齢者対象「健康特別教室」事業のアウトリーチ	
II 大学発スポーツクラブによる地域課題の解決	20
III 今年度の調査研究を終えて	30
1 大学発地域スポーツクラブの創設と可能性	
2 SIU スポーツクラブのアウトリーチ	
3 ダンス教室と健康教室の施行実施	
4 今年度の成果と課題	
【資料】 記録動画「SIU スポーツクラブ in いまかね」 健康特別教室・ダンス教室	37
【参考】 今金町と札幌国際大学の地域連携事業の歩み	38

I 研究概要

1 研究の背景及び目的

札幌国際大学は、令和 2 年度より中期計画に基づき、スポーツクラブの設立に向けた準備をすすめ、令和 4 年 4 月、「SIU スポーツクラブ」として、スタートをきった。その目的は、次のとおりである。

- ①スポーツ活動を通して、清田区民の健康の増進を図り、地域社会(清田区)への貢献に資する。
- ②スポーツ人間学部の教育活動における実践的な学習の場とする。
- ③清田区民と本学学生及び教職員との交流を深め、コミュニティの形成に寄与する。

一方、本学と地域連携協定を平成 24(2012)年度に締結した今金町は、農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農産物をはじめ、美しい自然環境、歴史的史跡も数多く残されており、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、人口減少や少子高齢化の進展による地域課題も山積している。とりわけ、町民の健康の維持・増進は重要な課題となっており、健康のためのスポーツ等の活動機会の拡充が求められるところである。

そこで本研究では、地域連携協定のもと、本学と多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、地域課題である健康の維持・増進に向けて、大学が有する資源であるスポーツクラブ事業をアウトリーチすることによって、その効果と課題を検討するものである。

北海道は、人口減少・高齢化により、健康が地域課題となっている自治体も少なくない。大学発スポーツクラブは、大学が位置する地域への貢献だけではなく、有する資源をアウトリーチすることで、道内の小規模自治体の地域課題解決の一助となることが期待できる。

なお、本研究にかかわる教員・学生及び今金町職員ならびに町民の健康を第一に考え、新型コロナウイルスの感染拡大の際には、大幅な計画変更も視野に入れ、可能な範囲での研究や活動を進めることとした。

2 研究組織・推進体制

本研究は、以下の者が担当する。

- | | | | |
|------|--------------------|----------|-------|
| (代表) | スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 | 教授 | 佐久間章 |
| | スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 | 教授 | 赤川智保 |
| | スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 | 教授 | 平澤芳明 |
| | スポーツ人間学部スポーツ指導学科 | 講師 | 本多理紗 |
| | 今金町まちづくり推進課 | 係長 | 加藤剛広 |
| | 今金町まちづくり推進課 | 地域おこし協力隊 | 榊原愛歌 |
| | 今金町まちづくり推進課 | 地域おこし協力隊 | 角谷有美香 |

本研究は、SIU スポーツクラブを担当するスポーツ人間学部所属教員が中心となり、学部学生を派遣し、今金町をフィールドとしてスポーツクラブのアウトリーチを試行実施する。なお、今金町においては、まちづくり推進課が担当窓口として大学及び町内関係組織等との連絡調整を務めた。

3 調査研究方法・スケジュール

本研究は、SIU スポーツクラブの運営にあたるスポーツ人間学部教員の指導の下に、学生が中心となり実施するSIU スポーツクラブの事業を、今金町にアウトリーチする。事業の効果およびアウトリーチの課題等についての資料を得るものである。

今年度については、健康増進をテーマにゼミ活動を展開しているスポーツ指導学科所属本多教員とゼミ生によるシニア対象の健康教室と、昨年度「いまかねスマイルダンス」の制作を担当したスポーツビジネス学科所属赤川教員とゼミ生によるジュニア対象ダンス教室のアウトリーチを行う。

また、全国で中学校部活動の地域移行が模索されている中、SIU スポーツクラブによる地域移行を目指す部活動支援について、今金中学校等を対象に基礎データの収集を行ない今後の検討資料とする。

【研究方法】

教室参加者の参与観察を中心に、適時アンケート及びヒアリング等の調査を通して、資料を得る。

【実施状況(計画)】

- 4月19日 今年度の研究計画等についての協議①(オンライン)
- 5月31日 今年度の研究計画等についての協議②(オンライン)
- 6月25日 今年度の研究計画等についての協議③(札幌国際大学)
- 8月29日 今年度の研究計画等についての協議④(今金町)
- 11月9日～10日 「ジュニア対象ダンス教室」のアウトリーチ(今金町)
- 11月12日～13日 「シニア対象健康教室」のアウトリーチ(今金町)
- 12月～1月 地域部活動に関する調査(今金町)
- 3月下旬 年度末協議 今年度の評価と次年度の取組について(今金町)

II アウトリーチによる活動概況及び成果と課題

1 幼児対象「ダンス教室」事業のアウトリーチ

～「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」の発展的活用の成果～

誰であっても何度か繰り返して踊りたくなる「I・MA・KA・NE ～スマイルダンス～」は、2020 年に札幌国際大学と今金町の共同事業「今金プロジェクト 2020」の一環として作成した DVD「今金版 いきいき健康体操 ～元気にエクササイズ～」に、収録したものである。

このDVDは、札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツビジネス学科で学ぶ学生 12 名が、今金町在住の高齢者の健康増進をテーマに「膝痛・腰痛・転倒・認知」の 4 つの予防の観点から、高齢者が健康でより良い日常生活を送ってゆく上で必要な運動をわかりやすく演じながら解説したもので、特に下半身の運動を中心としたエクササイズになっている。

これに対して、ダンスとして制作された「I・MA・KA・NE ～スマイルダンス～」は、下半身よりも上半身の腕や手指の運動を中心に、気軽に楽しく踊りながら健康増進に役立ててもらおうと、札幌市在住のシンガーソングライターの島みやえい子氏(作詞・作曲・歌唱)に今金町をテーマにしたオリジナル楽曲を依頼し、それに赤川智保(札幌国際大学)が振付けたオリジナルのダンスソングである。このスマイルダンスは高齢者から幼児まで幅広い年代の方が踊れるように、軽快なリズムに乗って今金町の四季の流れを特産物、風物詩などを織り交ぜながら、総体的に豊かな自然の恵みが表現されている。

また、このスマイルダンスは、札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツビジネス学科の専門科目「ヘルスプロモーション演習」でも取り上げ、地域在住の 3 歳から小学 6 年生の子どもたちや、高齢者にも「誰であっても何度か繰り返して踊りたくなる」不思議な魅力がある、と大好評であった。

翌年 2021 年度は、このオリジナル楽曲「I・MA・KA・NE ～スマイルダンス～」の振付をもっと分かりやすく知りたいという今金町のリクエストにこたえる形で、初めての人でも簡単に振付を覚えられるように 20 名の学生による「今金プロジェクト 2021(札幌国際大学)健康チーム」が新たに結成され、振付を分かりやすく解説するために、動画による解説に加え、紙面(絵図)でもわかるように舞踊譜と動画の作成に取り組んだ。



■ 「今金プロジェクト 2021」スマイルダンス学生ダンサーズ(札幌国際大学)右はドローン撮影本学第一体育館にて

(1) 今金町での贈呈式 2022 年 3 月 28 日(月)



■ 今金プロジェクト 2021(札幌国際大学)健康チームの代表が成果物の進呈式に参加



■ 贈呈式での制作や今後の発展的活用について学生によるプレゼンテーションの様子



ダンスの振付を分かりやすく解説した「I・MA・KA・NE ～スマイルダンス～」の DVD 動画は、今金総合体育館の 1 階の談話コーナーのモニターで随時再生され、トレーニングルームやスポーツで体育館を訪れた町民がいつでも気軽に映像を鑑賞することが出来るように設置されている。



■ 総合体育館に設置された解説動画「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」視聴コーナー

(2) 「認定こども園いまかね」における発展的活用について

「認定こども園いまかね」は、町立今金保育所と町立今金幼稚園、そして今金小百合保育園の 3 施設が統合し、今金町の支援の下、社会福祉法人函館カトリック社会福祉協会が平成 23 年 4 月に開設し、保育園・幼稚園を一体的に運営してきた幼保連携型の施設である。

平成 27 年 4 月からスタートした「子ども・子育て支援新制度」に伴い、当園も新認定こども園法に基づき新制度へ移行し、幼保連携型新認定こども園としての認可が一本化された。これまでと同様、就学前の子どもに対して幼児教育・保育を一体的に行い、地域における子育て支援を行う認可保育施設として、“すべての子どもの最善の利益に向けて”を念頭に子育て支援の拡充を図るよう努めている。今金町は超少子・高齢化の進む日本において「認定こども園いまかね」を中心に、今金総合体育館、老人福祉センター、学童保育所、地域子育てセンターが共に隣接し、町民の生活を総合的に地域全体で教育・保育を支援できる仕組みや体制作りを先進的に行っている。



■ 「認定こども園いまかね」の環境は、広い敷地を有し、園内は光をたっぷりと取り込んでいる

1) 運動会での活用について

2022年7月2日(土)に「認定こども園いまかね」の運動会が開催され、その際に「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」は競技前の準備運動として、全クラスの子どもたちが取り組み披露された。3月に進呈した「みんなで楽しく踊ろう！I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」の振付解説動画と舞踊譜をもとに、担当の先生方が、年少、年中、年長の園児たち全員が踊れるように、振付の一部をアレンジした。認定こども園いまかねの垣本まき子園長によると、楽曲のリズムは幼児のワクワク感を高め、身体を動かすにも丁度良いテンポであり、また、詩の内容も今金町の子どもたちに馴染みの言葉で分かりやすく、あっという間に覚えることが出来た、とのことであった。さらに、指導者が振付の動きを説明し練習を重ねる中で、子どもたちが自ら声を出し始めたので、ダンスをしながら要所要所にセリフ、笑い声、クラップなども追加し、それら現場の工夫も加えられたことで、元気いっぱいのスマイルダンス「いまかねこども園バージョン」が誕生することになった。



■ 当日は今金町のマスコットキャラクター「いまルン」も一緒に「わっは、は、は、は、は！」



2) 幼児対象「ダンス教室」活動内容

▶ 視察（2022年8月29日～30日）

今金総合体育館の管内施設を見学後、認定こども園いまかねを訪問し、会場となるホールや対象となる

麒麟組(年長)の園児たちに運動会で踊った「I・MA・KA・NE～スマイルダンス・こども園バージョン～」を踊ってもらい、こども園と今金町担当者を交えて打ち合わせを行う。



■ 認定こども園いまかねの多目的ホールでダンスのリハーサルする麒麟組(年長)

▶ダンス教室 (2022 年 11 月 10 日)

- ・場所:いまかね認定こども園 多目的ホール
- ・時間:11:00～12:30
- ・目的:「I・MA・KA・NE スマイルダンス～いまかねこども園バージョン～」のビデオ撮影と子どもたちとの交流 基本となるスマイルダンスの振付、動きのポイントの指導
- ・受講者:認定こども園いまかね 麒麟組(年長 22 名)
- ・サポート:クラス担任 2 名
- ・学生チーム:毛内彩月(観光ビジネス学科)三浦涼・桃井万莉(スポーツビジネス学科)
- ・今金町職員:榊原愛歌 角谷有美香(今金町まちづくり推進課地域おこし協力隊)



■今日のイベントを心待ちに、楽しみにしていた元気いっぱいの麒麟組のこどもたち





■ 肘の上げ下げは「わかちこ！わかちこ！」と大きな声でリズムに乗って、元気よく！

(3) まとめ

大学における研究や教育の、いわゆるアウトリーチの一環として、札幌国際大学スポーツ人間学部の特質を生かした試みである大学スポーツクラブの設立とからめた今金町との連携は、「誰であっても何度か繰り返して踊りたくなるスマイルダンス」という、地域の住民に対して、スポーツに根ざした身体運動を定着させることをめざした、独創的コンテンツとして結実した。

映像を見てもらえば一目瞭然のように、小さな身体をフルに使って元気いっぱいいきいきと踊る地元今金の子どもの表情や、その動きからも、このダンスがもたらした「身体を動かすこと」の楽しさや魅力が素朴に伝わってくる。「健康」とは、単にフィジカルな肉体だけでなく、心と身体の連動が無ければ真の健康とは言えない。この場合の「身体」とは、われわれ人間が意識し、意味づけている身体認識といった部分も含めたものであり、われわれにとっての「健康」とはフィジカルな肉体、いわゆる医学的・自然科学的な意味でのそれと共に、それら身体認識としての身体とも複合した「身体」が、持続可能な望ましい状態に保たれていることでもある。そのような意味で、心のゆとりや喜びといった形にならない、具体的に見えにくい要素もまた、われわれの「健康」には不可欠なのである。フィジカルな肉体を動かすことに、楽しさや喜びが伴わないところには、本当の意味での「健康」は宿らない。

また、このスマイルダンスは、地元の人々が生きて暮らしている今金の特産物や、四季を織り交ぜた自然環境に触れた歌詞も彼らにとって身近なものになるよう工夫されている。それらを通して改めて地元に対する認識、いわゆる郷土愛も育まれ、そのような方向からも、心と体のバランスをはかることが期待される。身体を動かしながら、それら地元今金についての「うた」を耳にし、あるいは時に声にして「うたう」ことで、自分たちが日々暮らしている今金という場所に対する認識が新たになり、郷土という意識も確かなものになってゆくことを期待している。

先にも述べたように、今金町はこの認定こども園いまかねの中に子育て支援センターがあり、その隣には町民の健康維持・推進を担う今金総合体育館、さらに近隣に老人福祉センターと、そのセンター内に開設している学童保育所「ルンルンこどもクラブ」など、全国的な規模で急速に進行し、わが国の国家的な喫緊の課題となっている少子・高齢化を地域の目線から見据え、町民の健全な暮らしそのものを総合的にとらえて、教育も保育も同時に支援できる仕組みや態勢づくりに努力している自治体である。

そのような環境ゆえ、このスマイルダンスというコンテンツは、健康づくりを目的とした企画から生まれたが、子育て支援センターや隣接する体育館、老人福祉センターから学童保育所などにも自然に共有されていくことが期待される。子どもたちから、子育て中の保護者やそれを支援する地元の高齢者など、世代を越えた地域ぐるみでこのコンテンツを活用できる機会が与えられたことは、この今金町で展開できたがゆえの恩恵だった。

アウトリーチという言葉は、もともと福祉関係から出たものだと言われているが、近年では企業や大学など、もともとそれらが行っている事業を本来の守備範囲を越えた提供してゆくことで、地域や社会に対してそれまで以上の関わり方を介して新たなニーズや課題を掘り起こして行く営みとして使われるようになっている。本学が行っている大学スポーツクラブも、単に大学が得意としているスポーツ種目をベースにした入門的コースやカルチャー教室的なものだけでなく、このようにある地域全体を包摂し得るような、良い意味での「地元」意識までも涵養してゆけるようなアウトリーチのためのコンテンツの可能性を、今後は共に考えてゆく非常に刺激的な契機になったと思う。このような機会を与えていただいた今金町と地元の方々に、深く感謝したい。

(赤川智保)



2 高齢者対象「健康特別教室」事業のアウトリーチ

超高齢社会の日本において、高齢者が適切な運動を行い、筋肉量の増大や筋力強化、歩行能力や ADL、身体機能の向上を図ることはサルコペニアやフレイルを予防し、高齢者の健康寿命を延ばすことにつながる。

ノルディックウォーキングは、通常のウォーキングよりも運動量が多くなるにもかかわらず、膝や足への負担は大きくならないため、高齢者の歩行能力に対する効果やリハビリテーション効果などの様々な効果があり、安全に運動効果をより実感できるものである。SIU スポーツクラブでは、ノルディックウォーキングを展開している。今回は、ノルディックウォーキングに加え、積雪期は、外出の頻度が減少し、筋力が低下しやすくなるため、家でもできる運動(筋力トレーニングやストレッチ)を展開し、転倒予防を目的とした健康特別教室のアウトリーチを行った。

(1) 学生の取り組み

学生においては、コロナ禍において、活動の中止や制限が多くあったものの、ゼミのフィールドワークとしてノルディックウォーキングや健康体操教室を行っている。各地域で行われているノルディックウォーキング教室(年3～5回実施)や健康体操教室に参加し、子どもから高齢者までの幅広い年齢層への対応や実技指導を経験している。3 年生においては、コロナ禍において活動が十分ではないが、ノルディックウォーキング教室には多く参加している。ノルディックウォーキングの運動指導や今後の活動において 3 年生が主体的に自主的に活動ができるよう 4 年生が 3 年生の育成をし、プログラムを展開できるよう内容を確認しアウトリーチすることとした。また、積雪期は、外出の頻度が減少し、筋力が低下しやすくなるため、今回は家の中でもできるトレーニングやストレッチをふまえたプログラムを考案した。

1) 学生の活動内容

①2022 年 10 月 19 日(水)プログラム内容の検討

プログラムの設定時間や目的を話しあった。60分のプログラム内容とし、転倒予防を目的とした。

具体的には、①アイスブレイキング(10分～15分程度)②筋力トレーニング(15分～20分程度)③ポールを使用したストレッチ(10分～15分程度)④ノルディックウォーキングの紹介(10分程度)とした。

アイスブレイキングチームと筋力トレーニング・ストレッチ班チームの 2 チームに分かれ、各プログラムの具体的な内容の検討を行った。

②2022年 10 月 22 日(土)SIU ノルディックウォーキング

ポールの使用方法や歩き方、ポールを使用したストレッチなど実践を通して確認を行った。



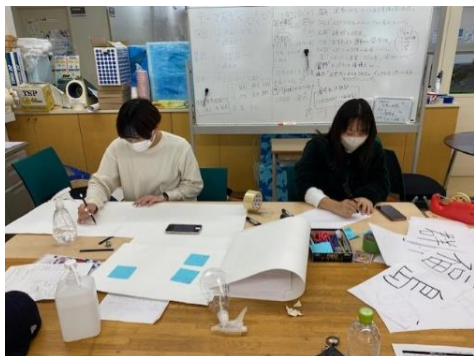
(写真1) 用具の調整



(写真2) ポールを使用したストレッチ

③2022 年 10 月 26 日(水)各チームでの話し合い

前回話しあった内容をより具体的な内容での検討を行った。目的・対象者に合わせた内容であるか実践を通して確認をし、高齢者の運動指導を豊富に経験している 4 年生が指導を行った。(表 1)また、各チームにおいて指導案を作成し、全員が流れを把握できるよう可視化し共有できるように工夫した。



(写真3)アイスブレーキングチーム



(写真4)筋力トレーニング・ストレッチチーム

表 1 プログラムの内容(1 時間程度)

プログラム の流れ	アイスブレーキング	筋力トレーニング	ポールを使用した ストレッチ (部位)	ノルディックウォーキングの紹介
内容	・後出しじゃんけん ・グーパー体操 ・虫食い文字クイズ ・都道府県クイズ	・足踏み ・ボールアダクション ・カーフレイズ、トゥレイズ ・足指ボールつかみ ・腹筋	・ハムストリングス ・胸部 ・腰部 ・足首 ・首	・ノルディックウォーキングとは ・ポールについて ・歩き方の紹介

④11 月 2 日(水)各チームの練習

プログラムの内容を確定し、4 年生が高齢者役となり、実際に指導の練習を行った。改善点が多くあることがわかり、4 年生の指導方法等を参考にした。



(写真5)後出しじゃんけんの練習



(写真6) 筋力トレーニングの練習



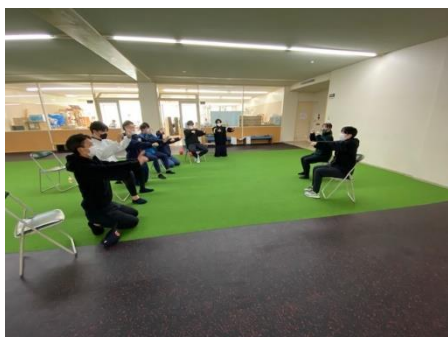
(写真7)ボールを使用したストレッチの練習



(写真8)4年生による指導の見本

⑤11月9日(水)最終確認とリハーサル

4年生が高齢者役になり、実際の声かけや安全管理、などの確認も含めたりハーサルを行った。3年生は、4年生からのフィードバックを参考にし、本番へ向けて良かった点や改善点を確認した。



(写真9)グーパー体操の練習



(写真10)虫食い文字クイズの練習



(写真11)筋力トレーニングの練習



(写真12)ボールを使用したストレッチ

⑥11月11日(土)今金プロジェクト本番 14時から15時 美利火河交流センター 9名参加



(写真13)後だしじゃんけん



(写真14)グーパー体操



(写真16) 足踏み



(写真17) ボールアクション



(写真18) ポールを使用したストレッチ



(写真19) ノルディックウォーキングの紹介



(写真20) 参加者との交流



(写真21) 参加者との交流



(写真22) 教室後の茶話会

⑦11月11日(土)今金プロジェクト本番 10時から11時 花石交流センター 12名参加



(写真23)後出しじゃんけん



(写真24)虫食い文字クイズ



(写真25)筋力トレーニングの説明



(写真26)ポールを使用したストレッチ



(写真27)ノルディックウォーキングの紹介



(写真28)ノルディックウォーキングの体験



(写真29)参加者との交流



(写真30)参加者との交流

2)参加者の感想（学生によるヒヤリング）

参加者の感想は、教室終了後に学生が参加者にヒヤリングを行った。（表2）

表 2 学生によるヒヤリング

教室に参加した感想	・とても楽しかった。 ・とても運動になった。 ・若い子が来て、とても新鮮だった。 ・久しぶりに運動ができてよかった。 ・とても楽しく運動ができた。すごく良かった。 ・たくさん話ができ、うまくいって楽しかったです。 ・グーパー体操が難しかった。楽しかった。 ・学生とできることを楽しみにしていたので楽しかった。 ・元気もらえた。若いってすごい。 ・花石が元気になった。
運動は普段からされていますか？	・散歩程度(1日に何度でも) ・毎日ねこと遊んで体を動かしている。 ・散歩など歩いている。(2名) ・たまに仕事体を動かす。 ・外にはでないが家でねこと遊んでいる。 ・林道を自転車で移動をするくらい。 ・普段はやっていない。 ・階段を昇る。ねこと遊ぶ。 ・2時半～4時半まで畑にでている。 ・農家のため運動は意識してやっていないが、しゃがんだり汗はよくかく。 ・介護系の仕事をしているため時間はないが、毎日職場で走り回っている。(忙しい) ・冬はストックをついて外出している。 ・スポーツの指導をしている。 ・野菜仕事。 ・少し前まで運動ができていたが、最近はできていない。 ・散歩・ストレッチ・かかと上げ、つま先上げをしている。 ・若い頃はやっていたが今はできていない。
本日の教室の中で良かった運動や日常生活の中で取り入れてみたい運動はありましたか？	・グーパー体操 (昨日、テレビでもやっていてその時は上手くできなかったけど今日は上手くできた。) ・体操はやってみたい。 ・首の運動は肩こりがあったため良く効いた。今後もやりたい。 ・筋トレ・ストレッチ共に身体が温まった。上着を脱ぐぐらい暑くなった。 ・ノルデックウォーキング ・筋トレやストレッチを取り入れていきたい。 ・腹筋が簡単にできたから良かった。 ・家でもできそうな体操だったのでやってみたい。 ・筋トレなどは積極的に取り入れたい。 ・全部 ・なかなか時間が取れないため難しいが、こういった教室があればやるけど、日常生活ではできない。
その他	・あまり家から出ない。人に会う回数が少ない。 ・反射神経を使う。じゃんけんやグーパーは、結構難しかった。(自身が反射神経はないためより難しく感じた) ・介護職のため活かしていきたい。

(2)まとめ

今回の特別健康教室の参加した参加者は、普段は仕事や散歩などで軽く体を動かしている人はいるものの、家でできる脳トレやストレッチ・筋力トレーニングの方法を知らない人が多かった。学生と一緒に楽しく交流しながら体を動かす良い機会になったと考えられる。また、ノルディックウォーキングについては知っている参加者や実践している参加者もいたが、正しい使用方法や正しい認識ができていない参加者が多く、今回のノルディックウォーキングの紹介や実際に歩いて体験をすることにより効果が実感でき、日常生活の中で使用するきっかけづくりになったと考えられる。そして、ほとんどの参加者が「とても楽しかった」「元気になった」と話しており、特に若い学生との関りは、参加者にとって精神的な面での健康づくりに貢献できたと考えられる。

学生においては、各地域のフィールドワークを通して高齢者との関りは経験しており、高齢者とのコミュニケーションはとれているものの、3年生は、実際に自分たちで考えたプログラムを指導・支援することが初めてであった。大学内での練習の時には、伝えるべき事柄や指導の姿勢、参加者への配慮において、改善点が多くみられた。日々練習を重ね4年生のサポートもあり、各チームでのプログラムの指導・支援を改善することができ、本番では、安全に配慮しながら進行することができた。これは、学生にとっては、とても貴重な経験と学びになったと考える。また、2日間の日程だったため、1日目の反省点を2日目に活かすことができ、改善したことが実感できたことも良かったと考える。4年生においては、3年生の指導役として全体をみて見守り、今まで培ってきた経験を3年生に伝え、サポートすることにより、さらに成長できたと考える。

アウトリーチをすることで、参加者は、学生と関わることで笑顔になり健康増進・維持をするきっかけづくりとつながる。学生は、参加者と関わることでコミュニケーション能力の向上、指導力の向上、人間力の向上など人材育成に必要な要素を多く含む貴重な経験をすることができる。このように、アウトリーチは、お互いにとって良い影響があり、多くの可能性があると考える。今後もアウトリーチを行う際は、町で必要としている内容の把握や開催時期や場所、道具の確保、参加者への周知など町との連携が大切であると考えられる。

(本多理紗)

資料 学生作成の各チーム指導案

今金町 冬に負けない力を作る 健康特別教室 アイスブレーキングチーム

(1)目的・目標

- ・脳を活性化させ、認知症の予防に
- ・手指を動かすことで血流をよくする

(2)本時の展開

段階	学習内容・活動	指導・支援上の注意点
導入 7分	○挨拶 ○アイスブレーキング ・後出しじゃんけん (あいこ・勝ち・負け) ・グーパー体操	・初対面の人たちのため、自分たちの自己紹介などをして慣れてもらおう。 ・距離を縮め、雰囲気をややかにするために体も気持ちもほぐす。 ・かなり強度が高いため、周りの学生のサポートをしてもらう。 ・前に出るとき左右逆にする。
展開 7分	○虫食い文字クイズ ・3問用意 ・各問1分くらいを目安 ○都道府県クイズ ・3問用意 ・各問1分くらいを目安	・距離を考えてみんなに見やすい位置になるようにする ・わかっていない場合あと何秒などと声かけをする ・距離を考えてみんなに見やすい位置になるようにする ・時間を見て、問題を省く場合もある
まとめ 1分	○まとめ ○挨拶	・次の筋トレにつなぐ終わり方をする。

筋力トレーニングチーム

○ 今金プロジェクト学習活動・指導展開 <学習指導案：時間計画>

段階	学習内容・活動	指導・支援上の注意点
導入 3分	○自己紹介 筋トレの効果について	簡単に名前のみ ・転落事故や転倒事故の緊急搬送 65 歳が 10 パーセント未満から始まり 5 歳ずつ年齢が上がるたびに 10 パーセント上がっており、90 歳になると半分以上が転倒、転落事故ということを話す。(自分の家のおじいちゃんも転んで運ばれた。そして運動をしなくなった体力が落ちたため。北海道では雪も降り転倒率も上がる。関東から来た初めての年に転んでけがしかけたことを話す。)
展開 15分	○足踏み ・かかと上げ、つま先上げ ・太ももボールつぶし	・ポイント 椅子に浅く座る。目線を下げずに前を向く。 腕を大きく振る。股関節から足を動かすイメージ(ちょうよう筋を働かす) できる人には膝を上げるように指示。 カウント 10 回 or5 回(石井) 効果 膝が上がりやすくなる。段差に引っかからない 効く場所前の太もも、ちょうよう筋 歩く時の動き出しがよくなる かかと上げポイント 肩幅に足を広げる。膝の角度は 90 度 実際に自分の足を触ってもらう ふくらはぎ(きゅってなる) 効果 ふくらはぎは第二の心臓なので鍛えることによって血流もよくなり冷え性改善にもつながる。 つま先上げポイント 同じく肩幅 90 度。 すねの筋肉を触ってもらう。(固くなる) 効果 脛の筋肉がないと足のつま先が下を向きちょっとした段差に引っかかり転んでしまう。←予防 踏ん張れる。 カウント 5 回 or10 回(松澤) これも同様に 90 度浅く座る ポイント ボールのしわがなくなるくらい力いっぱい力んでもらう。 しっかり息をする

	・足でボールつかみ ・腹筋	(吸って吐いてをこちらから指示し、吸うときは力を入れずに吐くときに力を入れてもらう) 効果 内側の太ももに効く。足が上がる。意識的に息をしているため腹筋にも！ 3 回から 5 回(石井)掛け声は(吸って吐いて) 浅く座る 石井、実戦でつかむ ポイント できなくてもつかみに行く動きをする。できない人が多いことを言う。 効果 つかむ動作によりふくらはぎと脛に効く。ボールをつかむことによって指が動くようになり雪道などでバランスを保てる。(踏ん張る) 20 秒から1分参加者を見ながら状況判断 周りの声掛け必須 タイムキーパー(篠田) 浅く座る 頭の位置は頭を守っているときの姿勢(腹筋するときのイメージのやつ) 手は胸でなるべく自分のおへそを見るイメージで行う 呼吸を止めずに行う。(吸って吐いてを言う) 効果 歩き出しがよくなる。バランスがよくなる 3 回から 5 回(松澤)吸って吐いて
まとめ 2分	○つぎにつなげる	・赤坂へ

今金プロジェクト指導案 ポールを使用したストレッチ

○ 本時の学習活動・指導展開 <学習指導案：時間計画>

段階	学習内容・活動	指導・支援上の注意点
導入 2分	挨拶	・
展開 5分	1 太ももを伸ばす運動 浅く椅子に座る。片方の足を前に出し、つま先を上げる。上半身を前にたおし、もも裏が伸びているようにする。ポールは使わない。各 10 秒ずつ行う。 2 胸を広げる運動 ポールを使用する。ポールを持ち先端はかかとの横おく。息を吸う時に腕を肩と同じラインになるように広げる。息を吐く時には、腕は胸の前に来るように戻す。5 回行う。 3 腰を回す運動(当日の場所が狭かったらカット) ポールを横に持ち、地面と平行になるようにする。背筋を伸ばし、姿勢を正す。(腰が痛い人は無理をさせない。)左右に捻る。10 回(5 往復)行う。 4 足首を回す。 ポールは 2 のようにセットし、足首を回す。各 10 秒行う。 5 首を伸ばす運動 ポールは使用しないので、2 本まとめて椅子の横に置いてもらう。自分のへそを見るようなイメージで首の後ろを伸ばす。首を左右に傾け、首の横を伸ばす。各 10 秒行う。	・参加者に無理させないように伝える。 前に石井と松澤が見本としていてくれるので、分からなかったら真似するよう促す。 全員の行動が把握できる位置取りをする。雰囲気作りを心がける。楽しく行う。
まとめ 1分	挨拶	・家でもできるから、ゆったりとした気持ちでできることを伝える。

II 大学発スポーツクラブによる地域課題の解決

1 大学連携のこれまでの経緯と成果

平成 24 年に今金町と札幌国際大学との間で、地域活性化や教育・文化の発展等を目的とした包括連携協定が結ばれ 11 年目を迎えた。連携事業の最初の年となった平成 24 年は、今金町内の様々な企業・団体に所属する若者 40 名で構成された町おこしグループである「今金町人流創生プロジェクト協議会(i プロ)」が発足した年であり、i プロの事業のひとつ「地域資源発掘・再発見事業」こそが今金町が大学連携事業の柱として計画を立てた事業であった。当初、この連携事業における町側の狙いは、今金町に新たな観光体験、田舎体験プログラムを作ることであり、「地域資源発掘・再発見事業」の名のとおり地域に長く住んでいると忘れがち、見落としがちな地域の良さを、学生との交流を通じ、よそ者目線、学生目線の意見をもらうことで、地域の若者達に気づきを与え、新たな発想で交流人口増加のアイデアを学生と地域の若者が協同して企画し商品化していくことだった。3ヶ年計画で進めたプロジェクトは数度のフィールドワークを経て得た成果として、清流日本一の川である「後志利別川」を下るラフティング体験(川下り体験)、今金町の歴史的背景にある砂金掘りをブラッシュアップし、観光体験として商品化させた。また、その年には外国人留学生を対象としたインバウンドモニターツアー、都市部の旅行客をターゲットとしたバスツアーの目玉プログラムとして町の主要観光プロジェクトに生かされた。



平成 25 年に実施された i プロと学生によるワークショップ



平成 25 年清麗祭に初出店したときの様子



砂金採りを実際に体験する様子



インバウンドモニターツアー(川くだり)の様子



町観光パンフ誌面。考案されたラフティング、砂金堀り体験は町の体験コンテンツとして活用

平成 27 年よりスタートした「今金プロジェクト 2015」では、前プロジェクトの横展開事業として観光振興を主眼とし、今金町にある自然環境資源をありのままに生かしたフットパスコースづくりをメインとする取組みをすすめる、田園風景と市街地風景を楽しむ2コースが作成された。当時、健康ブームの最中において約 10 年ぶりに町民向けの健康増進を目的とした「健康まつり」が開催されることとなり、そのイベントのメインプログラムである「ヘルシーウォーキング」のコースとしてフットパスを活用、また、学生が指導するノルディックウォーキング教室も同時に行われ、子どもから高齢者まで多くの町民が参加をした。このプロジェクトの成功をきっかけに、町側が大学連携事業に期待するキーワードとして「スポーツ振興」と「健康増進」の2つが大きく膨らんだのである。



町の田園地帯を巡りフットパスを考案する学生FW様子



町観光パンフレットに掲載しているフットパス



平成 26 年 9 月 21 日北海道新聞紙面



健康祭りで参加者指導を行う学生の様子

平成 29 年には、「今金プロジェクト 2017」がスタート。今金町美利河地区を研究フィールドに「歴史」「健康」「交流(観光)」をテーマに集落の住民や地元中学生など多世代の町民と学生がアクティブラーニングを通じて地域の課題解決の方策について検討・提案を行い、その研究成果として「今金プロジェクト 2017～”美利河”私たちの提案～」としてテーマごとに7つの提案が町側に示された。その後、町では、この7つの提案を活用すべく、さらに検討を重ねるため美利河地区の主役である美利河連合自治会を含む JA 今金町や観光協会等町の主だった 12 団体が参画する「美利河プロジェクト」を新たに発足させた。この7つの提案の検討にあたっては 3 年もの歳月を要し、ピリカプロジェクトで幾度となく議論が行われることになった。何故 3 年もの間、地域で答えが出せなかったのかであるが、その答えは、プロジェクトで7つの提案について検討及び調査を始めた段階で、実現が難しいと判断された提案が大半であったのにもかかわらず、この7つの提案をできる限り実現させなければという義務感で議論を続けたからである。そこで3年目は協議方針を変更し、7つの提案の実現に囚われるのではなく、「なぜ提案されたのか」「なぜ実現が難しいのか」「視点を変えることで実施可能か」「部分的に実施可能か」などを議題に1年をかけて協議を行った。その結果をまとめ、作成した報告書が「7つの提案に対する実施及び協議報告書」である。この今金プロジェクト 2017 の提案は地域にひとつの学びを与えた。それは、この連携事業の提案に関わらず外部機関等から受ける提案を検討し実施する場合は、まずは、その提案が今金町に対しなぜ提案されたかの背景を含め中身を分析し、出来る限り細分化したうえで、地域で持続可能なカタチに作り変えていくことが重要だという教えた。そのような経過を含め現在では、歴史チーム提案のスタンプラリーは、提案内容に沿ったかたちで、健康チーム提案のピリカマルシェは視点を変えたかたちとして、それぞれ令和 4 年度現在も継続されている。また、交流(観光)チーム提案の「町の主要観光施設「クアプラザピリカ」を交流施設の拠点とした役割強化」というテーマについては、引続きピリカプロジェクトにおいて令和 5 年度以降も検討が続けられる。

アンケートに答えると抽選で特産品が当たる
応募用紙

最近のアンケートに答えて頂いた方には今年の特産品を抽選でプレゼントいたします。また、ご応募する際にはお名前・住所・電話番号を裏面に記入ください。

アンケート用紙は、市庁舎で回収し、アンケート回答のみに活用させていただきます。

フリガナ

氏 名 _____ 連絡先（電話番号） _____

ご住所 _____

参加人数	男性	女性	男性	女性
0～9歳	△	△	40歳～49歳	△
10歳～19歳	△	△	50歳～59歳	△
20歳～29歳	△	△	60歳～69歳	△
30歳～39歳	△	△	70歳～	△

※抽選は抽選機を用いて行われます。抽選は10月末日までに行われます。抽選結果は抽選機で発表します。

お問い合わせ先：今金町企画課 電話：0137-62-0111（内線）

令和4年8月実施されたスタンプラリー。画像は台紙



令和5年2月に実施されたピリカマルシェの様子

今金プロジェクト×ピリカプロジェクト
7つの提案に対する実施及び協議報告書

PIRIKA PROJECT

7つの提案から3年後に完成させた報告書



7つの提案を検討実施する為に生まれた「ピリカプロジェクト」は令和5年度より町の観光振興を考え行動する団体として再スタートをきる。

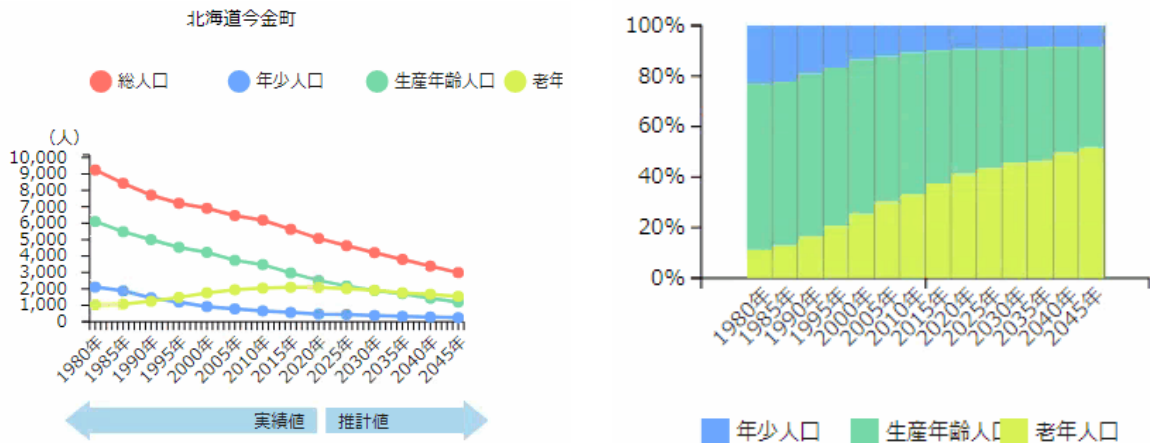
新型コロナウイルス感染症の流行の影響を大きく受けた平成31年以降のプロジェクトでは、思うような地域交流ができず苦しいプロジェクト運営となったが、町で実施をした健康づくりアンケートの回答者の7割が「非運動習慣者」であり、まちづくりアンケート回答者の6割の人々が「福祉・医療の充実」を望むという結果をもとに健康増進を目的とした事業を展開するなかで、「いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」ノルディックウォーキングの入門編動画、「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」といった3つの健康プロモーション動画が完成し町が受贈した。それぞれのDVDは健康づくりを行うプログラムの1つとして福祉・教育・集落支援の現場での利用や、図書室では貸出しDVDとして町民が気軽に借りて視聴ができるなど多岐にわたり町内で活用がされている。そして、2022年に実施された「大学発スポーツクラブのアウトリーチによる実証的研究」は、町側視点として、こども園における幼児教育過程での郷土愛醸造を図るためのダンス教室、そして健康教室開催による集落における健康増進策と集落コミュニティの活性化の調査の2事業が展開されたのである。

2 今金町が抱える地域課題

2020年に今金町で実施された国勢調査によると当時の人口は5,072人で、その内訳は、年少人口441人(9.53%)、生産年齢人口2,173人(46.95%)、老年人口2,014人(43.52%)となっており、今後10年で人口は4,000人をきり、老年人口は2030年を境に頭打ちするとの推計ではあるものの

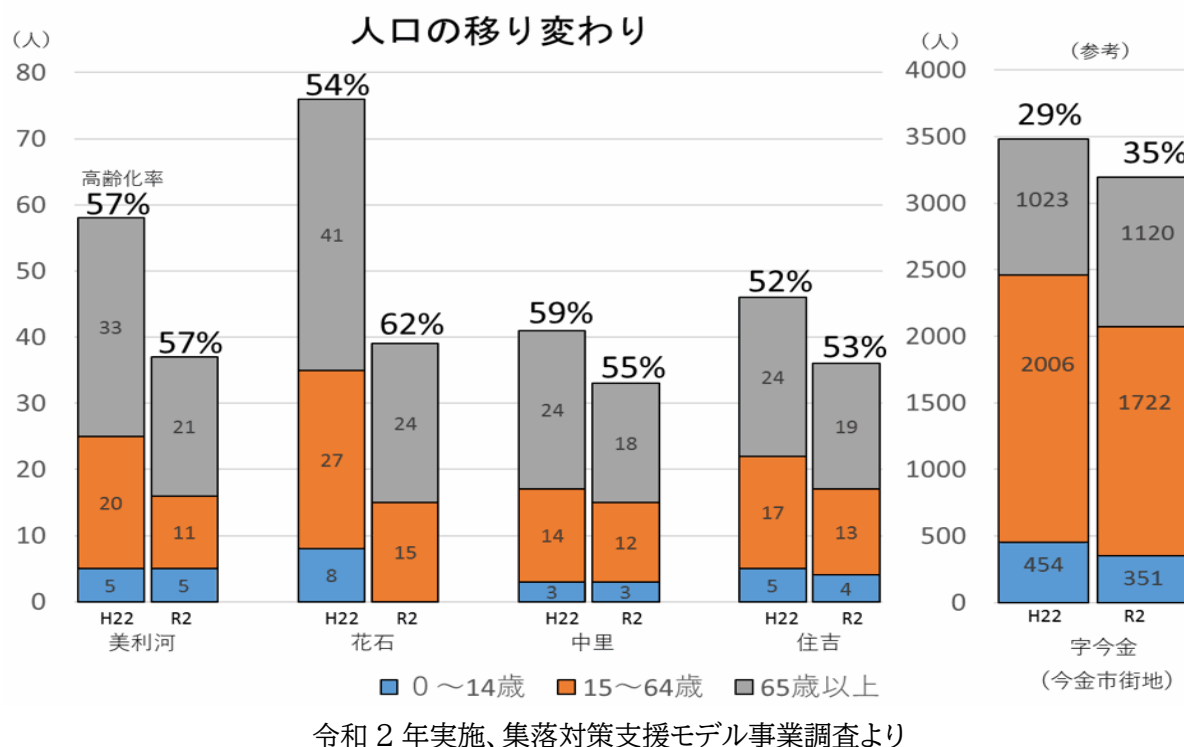
少子化は止まらず、2045 年以降もさらに少子高齢化が進むと推計されている。

今金町の多くの地域課題は、この少子高齢化に起因するものであり移住定住施策や子育て支援を通じ移住者確保の施策を長年講じているが、主要都市から離れ、交通の便や観光資源、働き口に乏しい農村部の今金町にあって、町と普段かかわりのない移住者の獲得は、困難を極めている。そこで必要となるのが、密な関係人口構築による長い目で見た移住施策と、定住人口流出を止める為の施策である。2017 年より今金町では「ワーキングステイ@いまかね」事業をスタートさせている。この事業は、都市部で働くりモートワークが可能な人々に今金町で普段の仕事をしながら生活を一定期間送ってもらうという内容であり一見して移住施策のように見えるが狙いは別のところにある。その狙いは、今金町の子どもたちが、今金町に働きたいと思える産業を生み出すことであり、都市部へ出て行こうとする子ども達に対し、都市部の会社で働きながら今金町に住むことができるという選択肢を示すというものだ。ただし、この事業の成功の鍵は、この事業自体ではなく、それ以前に子どもたちが故郷に対して愛着を持っているかどうかにかかっている。つまり、この事業を進めるにあたっての最大の課題は、子ども達の故郷に残りたい、戻ってきたいと思える郷土愛をいかに育むことができるかということになる。



グラフは RESAS(地域経済分析システム)より引用

少子高齢化のなかで、如実にその存在感を現した問題が集落問題である。少子高齢化が進むなかで町の市街地以上に著しい人口(世帯)減少がおり、高齢独居世帯が増加している。なかでも今金町の東側に位置する上地区と呼ばれる美利河、花石、中里、住吉の4地区は、4集落の平均人口が37人で、65歳以上の高齢者の割合は約57%となっており、市街地と比較した高齢者割合が22%も高く深刻である。集落における高齢独居世帯の人々は、これまで地域コミュニティー機能により支えられてきたが、人口減少・少子高齢化によりその機能が失われつつあるばかりでなく、高齢者の免許返納や地域交通路線の減少により買い物や通院の不便さは増し、さらには高齢化によって自身で行ってきたゴミ捨てや除雪などが困難となり、日常生活を維持することすら不安を覚える人々が増してきている。そのような状況から集落支援における町の課題は、集落に住む人々が日常生活で覚える不安解消ということになり、その解決策として、高齢者支援策や地域交通路線の維持など様々な対策を取ること、また、コミュニティーの維持には集落の人々に健康でいてもらうことが同時に必要であることから、今後は健康の維持増進策のより一層の推進が必要となる。



3 今年度の取組の成果

(1) ダンス教室

「認定こども園いまかね」は、町立今金保育所と町立今金幼稚園、そして今金小百合保育園の3施設が統合し平成 23 年に開設された保育園・幼稚園一体運営の幼保連携型の施設である。今回の研究事業ではこの今金町で唯一の幼児教育・保育施設であるこども園を舞台に学生によるダンス教室を実施した。この事業において町側の狙いは、幼児教育のなかに郷土愛醸造の機会を増やし、子ども達に地元への愛着を深めてもらうことにある。

この教室が行われるきっかけは、2 年前の 2020 年に実施された連携事業の成果物として「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」DVD を受贈したことに始まる。このスマイルダンスは、歌詞の中に今金町の歴史・観光・産業・特産品など町自慢の内容を全てが盛り込まれており、口ずさみ楽しみながら身体を動かすことでダンスを覚えると同時に、町のいいところを自然と学習することができる。町として最初にこの DVD の活用を考えた場所こそがこども園だった。こども園での活用が始まり数ヶ月がたった頃に、園の先生方へのヒアリングを実施したところ、その多くの意見として、「DVD を鑑賞するだけでは、振り付けを覚えることが少々難しく児童に教えることに苦心している」という内容だった。そこで、その意見を大学にフィードバックしたところ、2021 年の事業ではダンスの解説動画 DVD の作成をいただいた。早速この解説 DVD をこども園に渡したところ大評判となり、年長組での解説 DVD によるダンス指導が開始されたのが 2022 年の春である。その頃、こども園ではコロナ禍の影響がひと段落し、通常の運動会が 2 年ぶりに再開されるタイミングと重なったことから年長組のプログラム演舞の一つとして、スマイルダンスが組み込まれた。多くの父母や祖父母が見守るなかで、まだ、少々ぎこちないながらも笑顔で楽しそうにスマイルダンスを踊る園児達の姿は、長いコロナ禍で疲弊した人々の心を明るく照らしたことは間違いのないことだ。



こども園運動会でスマイルダンスを披露するキリン組の様子

教室では、ダンス解説 DVD で練習を続ける園児達に学生達が直接ダンス指導を行うものだった。この学生によるダンス教室開催の申入れをこども園に行ったところ、先生方の歓迎を受けたことは記憶に新しく、それほどにこのダンスがこども園で快く受け入れられているということにほかならない。ダンス教室の当日は、年長組の園児が学生達からダンス指導を受けた後に一緒にダンス披露を行った。教室が終わった後に参加園児達に感想を聞いたところ、皆笑顔で一様に「楽しかった」「またやりたい」と答えていたことから、子ども達にとってもスマイルダンスを踊る時間が楽しい授業として浸透していることがわかった。

今回のダンス教室の感想やスマイルダンスの活用状況、今後の活用、郷土愛を育むことができるかについて、園の先生方にインタビューを実施した。まずダンス教室の感想についてだが、「直接指導をもらえることは園児にとってもステップアップに繋がるのはもちろんのこと、多くの先生(学生)と交流できる機会も貴重な体験となっただろう」「(先生)自身も楽しく参加させてもらった。また、機会があればお願いしたい」など非常に評価が高かった。「現在のダンス活用状況は？」の問いでは「毎月お誕生会ステージで踊る」や「クラスの準備体操として使う」と日常的に活用されていることがうかがえ、「今後ダンスを活用できる場面としては？」の問いには、「町のイベント」や「小学校」という回答が多かった。また、「スマイルダンスを通して園児達の郷土愛を育むことに繋がると思いますか？」の問いにはインタビューをした4人の先生全員が「繋がる」と答えた。このインタビューから、今回のダンス教室が学生との直接的な交流により園児に好影響を与え、町の狙いである幼児教育を通して郷土愛を育むということについて、現状で一定の成果をあげており今後も十分な成果が期待できるといえるだろう。

(2) 健康教室

今回の健康特別教室の実施地区の選定にあたっては、町内でも特に高齢化が深刻な上地区と呼ばれ

る4地区より2地区(美利河地区・花石地区)をモデル地区として選出した。選出理由のひとつとして、4地区のなかでも1,2の高齢化率、美利河地区(57%)、花石地区(62%)となっていることがあげられる。令和2年度実施のヒアリング調査結果から、2地区の住人が不安を覚える要素の多くは、買い物・通院・ごみ捨て・除雪等の日常生活を維持することにある。また、それらの不安要素は集落コミュニティの助けあいでなんとか凌いでいるのが現状といえる。今回の健康教室開催の町側の狙いは、地区住人の健康増進策としての調査はもとより、それによる集落コミュニティの活性化に対し影響を与えるのかを調査することにある。

健康特別教室の参加者は美利河地区10名(大人7名、子ども3名)花石地区11名の参加となった。学生たちが考案した指導内容として、脳トレ、転倒予防を目的とした筋力トレーニング、ノルディックポールを使用したストレッチなどの内容でおおよそ1時間のプログラムを実施。教室の実施後はお茶会(学生との交流の時間)が設けられ参加者それぞれが、学生との交流時間を楽しんでいた。

教室終了後の参加者へのインタビューでは、「コロナ禍で集落のあつまりもなくなり、久しぶりにみんなの顔を見ることができて嬉しい」や「参加するまでは億劫な気持ちだったが、教室も交流も楽しく参加してよかった」など、参加者の声からは健康教室で学べたことというよりも、この教室をとおして「学生や地域の住民と交流しながら学習や運動もできたこと」について参加者の評価が高いことがわかった。地区の代表者へのインタビューでは、「集会の開催がしばらくできておらず、教室の開催によりお茶会も同時に開催でき住民との交流の場まで作っていただけたことは非常にありがたかった。今回1回きりで終わるのではなく、また開催してもらいたい」との声をいただいた。事後インタビューの結果から、今回のアウトリーチが集落における健康増進策として、また集落コミュニティの活性化に資することが十分に期待できることがわかった。



《美利河地区》

美利河地区 人口：37人(高齢化率：57% 世帯数：20(世帯内訳：下表))

一人世帯	二人世帯	三人以上世帯	施設入居者
9世帯	6世帯	3世帯	2世帯

自治会活動状況等について

- 自治会の集まりは年数回実施。お祭りの打合せやセンターの清掃など。
- 昨年まではお茶会を月1回程度行い、7～8人が集まっていた。来る人は固定されている。
- 高齢の男性からは「若い世代とは話が合わない。地区の舵取り役がいらない」との声もあった。

買い物・通院等について

- 高齢者の大半は車を所有し、買い物には特に不便は感じていない。
- 今金市街地または長万部へ買い物に行く。
- 日用品は、訪問販売車(週1回)を利用している人も多い。
- 通院に患者バスあるいは路線バスをよく利用している人は1名と少ない。

ゴミ捨てや除雪等の地区課題について

- 除雪は自分のできる人が多いが、独居の方で自治会長が除雪をしている所もある。
- 水道が通っていない世帯がある。

地区の将来等について

- 今後も住み続けたいと考えている人がほとんどだが、2人世帯の中には1人になった時に、1人で生活をするのは無理という人もいる。
- 酪農家3世帯では20歳代～40歳代の後継者がいる。
- 3年前にUターンで地区に戻ってきた人が1人いる。
- 居住はしていないが、両親の家を管理に毎週こられる方や今金市街地に居住しながら美利河に別宅を持つ人もいる。

《花石地区》

花石地区 人口：39人（高齢化率：62% 世帯数：22（世帯内訳：下表）

一人世帯	二人世帯	3人以上世帯	施設入居者
10世帯	8世帯	3世帯	1世帯

自治会活動状況等について

- 自治会の集まりは年数回実施。花植えやセンターの清掃などで20人程が参加をする。
- 婦人会が盛んであり、12人でお茶会・花植え・センターの掃除・敬老者訪問等を行っている。
- 郵便局が地域の憩いの場となっている。

買い物・通院等について

- 高齢独居世帯のうち4世帯が車を所有していない。この方々は近所の方の厚意により、車に乗せてもらい買い物、通院をしている方が多い。
- 日用品は、訪問販売車（週1回）やコープさっぽろを利用している人もいる。
- 通院に患者バスあるいは路線バスを利用している人は1名と少ない。
- 数ヶ月に1回程度、八雲などの病院にいくが路線バスは接続による待ち時間が長く不便である。
- としべつのデイサービスを利用している人が多い。

ゴミ捨てや除雪等の地区課題について

- 自分で除雪ができない人がおり、近所に除雪を手伝ってくれている方がいる。
- ゴミステーションが遠く、ゴミ出しが大変である。ルールは守るので個別収集してもらいたい。

地区の将来等について

- 今後も住み続けたいと考えている人がほとんどである。
- 冬の季節だけでも、町営住宅や施設へ入ることができればという方がいる。
- 老後は、JRがあるという理由から長万部町に移住したいという方がいる。

令和2年度実施の上地区ヒアリング調査結果より

4 今後の課題

今回実施した2つの実証研究では、町が望んだ事業成果を得られたといえる。しかしながら、いずれの事業にいえることであるが、地域が引き続き大学のアウトリーチを望んだ時にいかにして継続性を持たせるかが大きな課題となる。大学側としても慈善事業的な継続は当然ながらできず、町側のリソースや財源も限られていることから、例えば、長期的な視点で数ある集落全てに同様のサービス提供を考えた場合は現実的な手法であるとは言い難い。それでは、地域おこし協力隊のような外部人材にその役割を代行してもらうことも考えられるが、やはり最長3年の任期という壁にぶつかってしまう。では、どのようにして継続性を持たせるかであるが、解決手法の一つとしては、地域に根ざすコーディネーターの育成ということになる。大学と連携し、地域人材の育成ができるとすれば、様々な可能性が見えてくる。例えば、大学と連携した職員育成により集落支援分野における専門性を高めた役場職員の継続的な配置を可能とすることであったり、集落に住む若者が専業もしくは副業的に集落コーディネーターになれたとしたらどうだろうか。専門職員やコーディネーターの存在により、止まりかけたコミュニティーの歯車が円滑に回り始めることも十分に考えられるだろうし、その役割がsociety5.0の時代にあっても、すぐにAIに取って代わることはないだろう。では、こども園のケースはどうだろうか。人材育成による専門人材の新たな配置も考えられるが、大学との連携によるリスキリングにより現在所属している保育士の更なるスキルアップを行うことでダンス教室を展開するなど幼児教育の幅を広げることも可能となる。但し、それらの大学と連携した人材育成構想を実現するためには、町側の人材育成に対する本気の制度設計が必要であり、大学側の受入体制整備を進めるなど、今後更にステップアップをした連携関係を築いていかなければならない。

（今金町：加藤剛広、榊原愛歌、角谷有美香）

Ⅲ 今年度の調査研究を終えて

本研究は、スポーツ人間学部が主催する SIU スポーツクラブの有する機能を、今金町にアウトリーチすることによって、その効果および課題等についての資料を得ることを目的として実施したものである。今年度は、健康増進をテーマにゼミ活動を展開しているスポーツ指導学科所属本多教員とゼミ生によるシニア対象の健康教室と、昨年度「いまかねスマイルダンス」の制作を担当したスポーツビジネス学科所属赤川教員とゼミ生によるジュニア対象ダンス教室のアウトリーチを行なった。今年度の調査研究を振り返り、成果と課題及び今後の方向性について以下にまとめる。

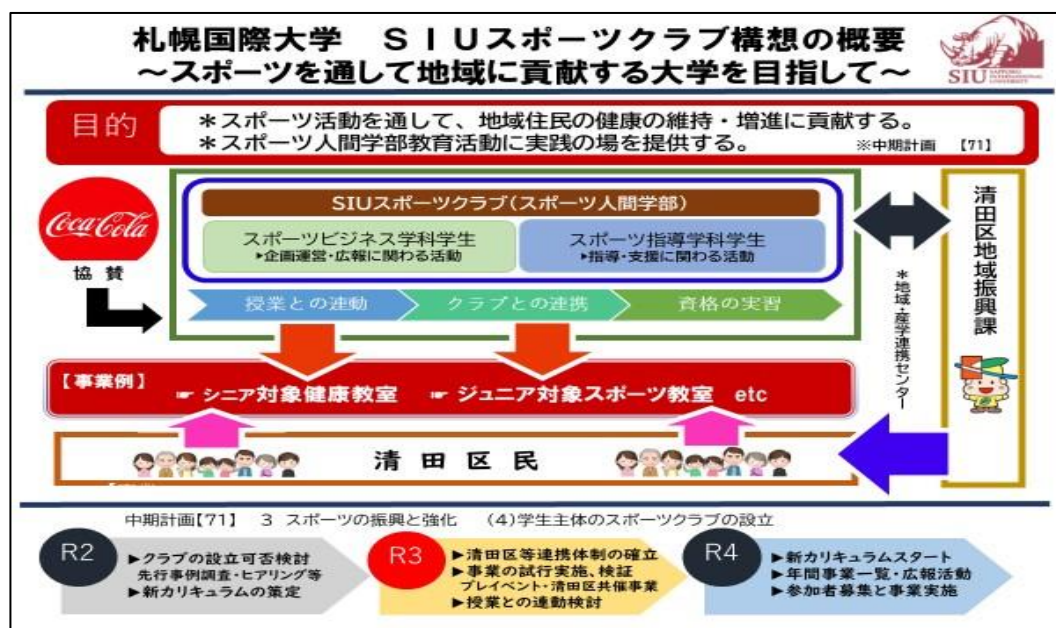
なお、全国で中学校部活動の地域移行が模索されている中、SIU スポーツクラブによる部活動支援について、今金中学校を対象に基礎データの収集等を予定していたが、調整に時間を要したため次年度以降の検討課題とすることにした。

1 大学発地域スポーツクラブの創設と可能性

SIU スポーツクラブは、令和 2 年度より札幌国際大学の中期計画に基づき、プレイベントとして実証事業を行い、令和 4 年 4 月に設立したものである。総合型地域スポーツクラブは、生涯スポーツ社会の実現のため、平成 7 年より文部科学省がスポーツ振興施策のひとつとして全国に展開しているものである。スポーツ振興基本計画では、全国の各市町村に少なくとも一つの総合型地域スポーツクラブをおくことを目指している。令和 3 年度の調査によると、令和 3 年 7 月現在、全国 1,408 の市区町村(1,741 市区町村中)において、総合型地域スポーツクラブが既に創設ないし創設準備段階にある。北海道においても、令和 3 年 6 月現在、53 の市町村に 72 のクラブが活動を展開している。

本学の SIU スポーツクラブが、総合型地域スポーツクラブと異なる点は、スポーツ人間学部の教育活動における実践的な学習の場としていることである。よって、運営の中心は学部学生である。

スポーツ人間学部の学生が学びの成果を活用し、スポーツ活動を通して、清田区民の健康の増進を図り、地域社会(清田区)に貢献するとともに、さらには、清田区民との交流を深め、コミュニティの形成にも寄与しようというものである。



令和3年度総合型地域スポーツクラブ北海道ネット加盟クラブ (2021年6月現在)

No.	区域	市町村名	クラブ名	No.	区域	市町村名	クラブ名
1	札幌市	札幌市	特定非営利活動法人札幌オールカマーススポーツ倶楽部	38	上川		高台チャレンジクラブ
2			特定非営利活動法人真駒内スポーツコミュニティクラブ	39		旭川市	一般社団法人旭川東豊スポーツクラブ
3			特定非営利活動法人AGGREスポーツクラブ	40			一般社団法人旭川緑が丘スポーツクラブ
4			一般社団法人コンサドーレ北海道スポーツクラブ	41		美深町	特定非営利法人びふかスポーツクラブ
5			Hokkaido Adaptive Sports	42		当麻町	特定非営利活動法人とうまスポーツクラブ
6			さっぽろ運動あそびクラブ	43		和寒町	わっさむフレンドパーク
7	石狩	江別市	北翔大学スポルクラブ	44	留萌	留萌市	るもいスポーツクラブ「このゆびとまれ」
8			一般社団法人わくわくピース総合型クラブ	45		初山別村	初山別総合型クラブ「楽すぽクラブ」
9		北広島市	特定非営利活動法人 きたひろちよいスポ倶楽部	46	宗谷	枝幸町	特定非営利活動法人枝幸三笠山スポーツクラブ(エムスク)
10		当別町	特定非営利活動法人 ふれ・スポ・とうべつ	47	オホーツク	網走市	特定非営利活動法人あばしりスポーツクラブ
11		新篠津村	遊ゆうクラブ	48		美幌町	びほろスポーツクラブBeet
12		石狩市	石狩市総合型地域スポーツクラブ アクト	49	胆振	壮瞥町	NPO法人そうべつ地遊スポーツクラブ
13		恵庭市	北海道ハイテクACアカデミー	50		むかわ町	特定非営利活動法人むーブ
14	渡島	函館市	一般社団法人ミスボはこだて	51		室蘭市	室蘭市中央地区スポーツクラブ
15			総合型潮スポーツクラブ	52		登別市	特定非営利活動法人おにスポ
16			総合型地域スポーツクラブBayWalkCommunityはこだて	53		苫小牧市	一般社団法人総合型地域スポーツクラブとまこまい・あそび塾
17		北斗市	特定非営利活動法人北斗スポーツクラブ	54		安平町	特定非営利活動法人アピーススポーツクラブ
18		鹿部町	鹿部カールスクラブ	55	十勝	幕別町	特定非営利活動法人幕別札内スポーツクラブ
19	檜山	今金町	総合型地域スポーツクラブいまかね	56			一般社団法人十勝総合型スポーツクラブ フーニ
20		せたな町	総合型スポーツクラブせたな	57		帯広市	清柳スポーツクラブ
21	後志	仁木町	銀山地区総合型地域スポーツクラブ	58			特定非営利活動法人緑ヶ丘スポーツクラブ
22		余市町	特定非営利活動法人よいスポ	59			おびひろの森スポーツクラブ「はつらつ」
23		小樽市	後志Ruumu.SC総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会	60		清水町	特定非営利活動法人清水町体育協会
24			FANスポーツクラブ	61		音更町	一般社団法人おん・おーる
25	空知	沼田町	一般社団法人N-link.	62	釧路	弟子屈町	摩周ふれあいスポーツクラブ
26		由仁町	由仁スポーツクラブ	63		釧路市	特定非営利活動法人桜が丘びなクラブ
27		美瑛市	美瑛どんまいスポーツクラブ	64			グルスの杜あかん スポーツくらぶ
28		新十津川町	特定非営利活動法人新十津川スポーツ協会 新十津川スポーツクラブ	65			大楽毛げんきスポーツクラブ
29		三笠市	みかさスポーツクラブぼっけ	66			とらいあんぐる946
30		岩見沢市	一般社団法人SLDI	67		釧路町	総合型クラブ 釧路スポーツ&カルチャークラブ
31		夕張市	ユるっとゆうばりスポーツクラブ	68	根室	中標津町	NPOなかしべつスポーツアカデミー
32			特定非営利活動法人あ・りーさだ	69		標津町	NPO法人標津スポーツクラブすばっと
33	上川	士別市	士別中央スポーツクラブ	70		羅臼町	NPO法人羅臼スポーツクラブらいず
34			多寄スポーツクラブ	71		根室市	ねむろコミュニティスポーツくらぶ
35		名寄市	一般社団法人風連スポーツクラブ	72	広域	帯広市	帯広市教育委員会生涯学習部スポーツ室スポーツ課
36		南富良野町	みなみふらのSHCクラブ ゆっく				
37		中川町	中川町総合型地域スポーツクラブ「なかがわスポーツくらぶ」				

《出典》https://hokkaido-sports.or.jp/chiki_spo_club/

創設初年度となる令和4年度は、通年科目である「生涯スポーツ演習」と「レクリエーション実習」と連動させ、週1回全6回の「シニアスポーツ教室(シニア対象)」と「キッズスポーツ教室(幼児対象)」を開講した。また、1日限定のスポット事業としてシニア対象の「ノルディックウォーキング」と小学生対象「“1DAY”キッズスポーツ教室」を開催した。春学期と秋学期に同事業を2展開実施した。

清田区との共催として、参加者を清田区民に限定して募集したが、全事業の延べ参加者数は、239名

(幼児 95 名、小学生 22 名、一般 50～60 代 56 名、70～80 代 66 名)であった。参加者からは、「若さあふれる学生さんたちと交流できて楽しかった」「来年もぜひ参加したい」「年齢に合わせて対応してくれた学生さん、先生ありがとうございました」「若いお兄さんお姉さんと、関わることがないので、子供がとても楽しんでいました」などの声が多く寄せられた。一方、学生にとっても、参加者への指導や声掛けなど、実践を通して学部での学びを活かす貴重な場とすることができた。

令和4(2022)年度 SIUスポーツクラブ年間事業

【春学期】

NO	事業名称(仮称)	対象	期間(回数)
1	シニアスポーツ教室 【第1期】	清田区在住 シニア	毎週木曜日×6回 6/16、6/23、6/30 7/7、7/14、7/21
2	キッズスポーツ教室 【第1期】	清田区 幼児(年中・年長)	毎週木曜日×6回 6/16、6/23、6/30 7/7、7/14、7/21
3	はじめてのノルディック ウォーキング	清田区在住 シニア	7月9日(土)
4	“1DAY”キッズスポーツ教室	清田区小学生	6月18日(土)

【秋学期】

NO	事業名称(仮称)	対象	期間(回数)
5	シニアスポーツ教室 【第2期】	清田区在住 シニア	毎週火曜日×6回 10/18、10/25、11/1 11/8、11/15、11/22
6	キッズスポーツ教室 【第2期】	清田区 幼児(年中・年長)	毎週火曜日×6回 10/18、10/25、11/1 11/8、11/15、11/22
7	秋を楽しむノルディック ウォーキング	清田区在住 シニア	10月22日(土)
8	“1DAY”キッズスポーツ教室	清田区小学生	12月17日(土)

2 SIU スポーツクラブのアウトリーチ

本学と地域連携協定を平成 24 年度に締結した今金町は、農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農産物をはじめ、美しい自然環境、歴史的史跡も数多く残されており、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、人口減少や少子高齢化の進展による地域課題も山積している。とりわけ、町民の健康の維持・増進は重要な課題となっており、健康のためのスポーツ等の活動機会の拡充が求められているところである。今金町をフィールドとした過去のプロジェクトにおいても、「ノルディックウォーキング解説動画」「今金版いきいき健康体操動画」「IMAKANE～スマイルダンス～の解説動画」の製作など、健康関連の取組を展開し、町民の健康増進の一助となるように活動を展開してきた。

人口減少・高齢化のすすむ北海道は、「健康」が地域の大きな課題となっている自治体も少なくない。前述の SIU スポーツクラブは、清田区民を対象として展開しているが、この機能をアウトリーチすることがで

ければ、健康問題を抱える自治体の地域課題すなわち住民の健康の維持増進に少なからず貢献できるのではないかと考える。総合型地域スポーツクラブが、地域に根差した取り組みであるのに対して、大学発スポーツクラブは、有する資源と機能をアウトリーチすることによって、より広域的なエリアの自治体への地域貢献を可能にすることができるのではないかと。本学は、現在道内 7 つの自治体と地域連携協定を締結し、地域をフィールドとした様々な活動を展開している。まさに、こうした連携自治体へスポーツク

主要地域産学連携協定先一覧(行政)

清田区	【地域振興】平成21年10月5日～
今金町	【地域連携】平成24年10月16日～
斜里町	【地域連携】平成26年8月4日～
浦河町	【地域連携】平成28年4月15日～
留寿都村	【地域連携】平成29年5月1日～
蘭越町	【地域連携】平成29年11月1日～
二セコ町	【地域連携】令和3年3月29日～
札幌市(総務局)	【国際交流・多文化共生の推進に関する連携】 令和4年3月18日～

ラブの機能を試行的にアウトリーチすることによって、データを蓄積し、事業をブラッシュアップすることによって、より機能的な大学発スポーツクラブのアウトリーチ事業として確立することにつながるのではないだろうか。今年度の今金町での取組は、まさにファーストステップであり、次に向けての課題の把握等を目的とした試行実施である。大学が位置する地域への貢献だけではなく、有する資源をアウトリーチすることで、道内の小規模自治体の地域課題解決に貢献できる可能性が大いに期待できるのではないだろうか。

3 ダンス教室と健康教室の施行実施

(1) 幼児対象ダンス教室

昨年の今金プロジェクトでは、町民の健康の維持・増進の一助となるツールの制作を行った。その一つが、「IMAKANE～スマイルダンス～」の解説動画制作である。一昨年、制作した健康増進プロモーションビデオ「今金版 いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」の巻末に収録した「スマイルダンス」について、動きをわかりやすく解説した資料の提供を、今金町からリクエストされていたことから制作したものである。当初は、高齢者の健康増進のためエクササイズとしてのダンスであったが、曲調や歌詞などが子どもにも合っていることから、同町の認定こども園で活用された。特に、運動会では園児が元気なダンスを披露したとの報告を受けた。こうしたことから、今回のアウトリーチ事業として、認定こども園へのダンス指導を計画した。詳細については、第2章第1節を参照していただきたい。

一般的にスポーツクラブというと各種のスポーツやトレーニング等が行われているものと想像されるが、今では子ども対象のダンスを取り入れる民間スポーツクラブも少なくない。民間スポーツクラブでは、様々な音楽とふれあい、元気いっぱいダンスを踊ることで、ダンスの基礎的な能力である「リズム感」「柔軟性」「体力」を身につけるとともに、さらには集団行動の中で礼儀やルール・マナー学ぶコース等が展開されている。

スポーツ庁も、運動習慣形成には幼児期の経験が重要であるとして、令和4年6月「幼児期からの運動習慣形成プロジェクト(保護者等の運動遊びに関する行動変容調査)」の公募を行っているところである。また、「体力・運動能力調査」では、成人のスポーツ習慣と、小学生時に運動を楽しんでいたことには強い相関が認められている。さらに、小学生時に運動を楽しんだ子供は、未就学時の外遊び回数が多いことが指摘されている。このように、幼児期の運動習慣作りは、子供の体力向上はもとより、成人以降のスポーツ習慣や高齢期以降の健康の保持にも大きな影響を及ぼすものであることから、幼児期からの望ましい運動習慣の形成に取り組むことの必要性を示している。

令和4年度のSIUスポーツクラブ事業の中には、幼児を対象としたスポーツ教室も実施したが、活動プログラムを通してダンスに係るものを取り入れるまでには至らなかった。しかし、今金町認定こども園でのアウトリーチは、今後のスポーツクラブの方向性を検討するうえで貴重な活動であったと考える。

(2) シニア対象健康教室

昨年の今金プロジェクトでは、町民の健康の維持・増進の一助となるツールとして、「IMAKANE～スマイルダンス～」の解説動画とともに、制作したのが「ノルディックウォーキング」の解説動画・資料である。今金町には、過去に本学とのプロジェクトで設計開発した「フットパスコース」があることから、ノルディックウォークの普及促進を図ることが、町民の健康の維持・増進に資すると考え、解説動画・資料を制作し、提

供した。

ノルディックウォーキングは、令和 4 年度の SIU スポーツクラブ事業の中でも、中心的な活動となっている。シニア世代を対象に、毎週実施のスポーツ教室(全 6 回)を春学期・秋学期にそれぞれ開催するとともに、1 日日程の「はじめてのノルディックウォーキング」、「秋を楽しむノルディックウォーキング」を開催している。いずれも 60～70 代のシニア世代が参加者の中心であるが、学内クロカンコースを歩くプログラムは参加者からとても好評を得ている。

一方、今年度今金町で開催した「健康教室」は、集落支援という位置づけの美利河地区及び花石地区にて開催した。詳細については、第 2 章第 2 節を参照していただきたい。それぞれの地区が有する集会所を会場にしたため、徒歩で集合する人がいる一方で、参加者の多くは町職員の送迎によって参集していた。参加者の年齢も幅広いため、活動に際しては最新の注意を払い、無理のない活動に終始した。年齢の若い参加者には、活動の物足りなさを感じることもあったと思われるが、活動以上に、久しぶりに集まったことに価値を見出していたことが印象的であった。新型コロナウイルスの感染拡大により、各地区の参加者が一堂に会する機会を設けることができなかったことも影響しているようである。いずれの地区の教室も、参加者の感想からは、学生主導によるアウトリーチ健康教室には、とても高い評価であった。

4 今年度の成果と課題

(1)コーディネーターの位置づけ

アウトリーチ事業を円滑に実施するためには、大学と連携自治体との円滑な連絡調整が最も重要である。今回の場合、今金町まちづくり推進課の地域おこし協力隊 2 名がコーディネーターとしての役割を果たしてくれたことに寄るところが大きい。認定こども園や対象地区との連絡調整が円滑になされたことにより、当日の事業運営に大きな影響が出ることはなかった。とりわけ、集落支援として実施した「健康教室」の場合は、住民への参加要請や会場までの足の確保など、事前の連絡調整や準備など、その役割は多岐にわたっていた。

アウトリーチを受け入れる自治体には、住民への参加要請、会場確保、交通手段など、受け入れ体制に係る連絡調整の役割を果たすことが必要となる。一方、大学は、活動プログラムの選定及び展開方法、指導体制の確保など、アウトリーチする事業プログラムに関する役割を果たすことが必要である。ただし、プログラムの選定及び展開方法の検討に際しては、参加者の身体的状況等を把握することが不可欠であり、自治体担当者との綿密な連絡調整並びに情報共有が必要となる。いずれにしても、自治体と大学との窓口を明確にするとともに、自治体サイドにはコーディネーターの位置づけこそが重要ではないかと考える。

(2)保健部局等との連携

町民の健康の維持・増進は、アウトリーチにより開催する 1 回限りの教室に、過大な期待をかけることはできない。教室は、あくまでも健康に対する意識と行動のきっかけになるだけであり、日常的に取り組むためのモチベーションを高めるなど、意識・行動等をサポートする人材こそが極めて重要である。そのためには、自治体の健康・保健を所管する部局との連携も視野に入れるべきであろう。アウトリーチ前に、参加者の日常の生活や健康状態について、保健師等との情報共有ができればプログラムの選定及び展開方法の検討に有益な情報となり、より効果的なプログラムとすることができる。また、保健師による教室参加者への事後指導が、継続的に行われることにより、その効果が一層高まることが期待できる。

(3)相互の信頼関係の構築と成果の享受

本学と今金町は、平成 24 年度の協定締結後、途切れることなく毎年共同で連携事業を実施してきた。とかく、連携事業は、協定締結後の盛り上がりを経て、次第に縮小し、停滞してしまうケースが多くみられる。しかし、停滞することなく 10 年間も継続してきた同町との連携には、双方にメリットがあるということが大きなポイントと言える。連携事業が停滞するケースの主因は、一方のみにメリットがあり、メリットにかける他方はメリットを期待せずに協力できる間は良いが、人的、財的にも協力が難しくなると、次第に縮小し停滞の一途を辿ることになる。本学と今金町との連携事業は、成果を双方で享受できる所謂「Win&Win」の関係を大切にしてきたことにある。今金町にとっては、地域の課題を大学の資源・機能及びネットワークを活かし、解決に向けてのヒントを得ることができる。一方、大学は健康スポーツを学ぶ学生の実践的な学びのための活動フィールドを得ることができる。今回の取組では今金町は、スポーツ学部を有する大学の機能として「SIU スポーツクラブ」のアウトリーチを受けることにより、地域課題である町民の健康づくりに成果を得る。一方の大学にとっては、ダンス指導やノルディックウォーキングをはじめとする健康指導等の実践的な活動機会を確保することができた。このように、常に「Win&Win」の関係が構築できるようにプロジェクトをデザインしていくことが大切である。

今年度は、SIU スポーツクラブの有する機能を、道内の自治体にアウトリーチすることによる効果と課題等についての資料を得ることを目的として実施した。前述のように、今金町とは、連携事業を実施してきた実績があり、綿密な連絡調整体制も確保されている。今回のケースを他の連携自治体にそのまま当てはめることはできないかもしれない。しかし、SIU スポーツクラブのアウトリーチによって、地域の抱える課題解決の一助となること、そして、学生の実践的な活動機会を確保できることが確認できたことは十分な成果と言える。一方で、今回の対象者は、幼児と高齢者が中心であったが、今後は地域の実情を踏まえた対象者の選定及び提供する多様な活動プログラムの開発等を進めていくことが課題と言えよう。

5 SIU スポーツクラブの今後の方向性

学校の部活動が大きな過渡期を迎えようとしている。その背景にある最も大きな要因は、少子化による生徒数の減少である。中学校の生徒数は昭和 61 年の 589 万人から令和 3 年には、296 万人へと半減している。今後も生徒数の減少が加速することが確実なものとなっている。こうした生徒数の減少によって、運動部活動に必要なチーム数を満たさない部活動も増えてきた。加えて部活動の種類や価値観の多様化が進み生徒の希望する部活動が無いといったことも起きている。このことは、都市部以上に人口の少ない自治体には顕著な傾向である。人口の減少により学校の統廃合が加速している北海道には、大きな課題と言える。また、一方では、世界一多忙と言われる日本の学校教員にとってとりわけ休日における部活動の指導は大きな負担となっていることが指摘されている。さらに競技経験のない教師が指導していることも多いといった課題もある。

こうした背景のもとスポーツ庁は、運動部活動の地域移行に関する検討会議を立ち上げ、提言をまとめ公表した。その中では、改革の方向性として休日の部活動を段階的に地域に移行していくことを基本とし、目標時期は令和 5 年度の開始から 3 年後の令和 7 年度末という方向性を示している。

道内でも、登別市、当別町、紋別市などがモデル市町村として実践研究が行われた。また、北海道教育委員会は、「北海道部活動の地域移行に関する推進計画(仮称)素案」を作成し、令和 4 年 12 月に、パブリックコメントを実施している。

本調査研究では、今年度、今金中学校を対象に、部活動についての基礎データの収集等を予定していたが、次年度以降に見送ることとした。北海道においても、休日の中学校部活動の地域移行が喫緊の課題となっている中、SIU スポーツクラブが部活動支援の一助に成り得る可能性は大いに考えられる。スポーツ人間学部を有する本学の機能を最大限に生かすことによって、道内自治体の部活動の地域移行の大きな力になることができるのではないかと思う。地域に根差し、地域に貢献する SIU スポーツクラブにとって、重要な今後の方向性の一つである。

（佐久間章）

【資料】動画「SIU スポーツクラブ in いまかね 健康特別教室・ダンス教室」



今金町×札幌国際大学
健康特別教室

冬に負けない体をつくる！！

2023.11.12(土)-13(日)

SIUスポーツクラブのアウトリーチ！



今金町×札幌国際大学

スマイルダンス

0:00 / 3:15

SIUスポーツクラブ in いまかね～ダンス教室～



【参考】今金町と札幌国際大学の地域連携事業の歩み

今金町と札幌国際大学の地域連携事業に関する協定書(平成24 年10 月16 日)

(目 的) 第1条 この協定は、両者が包括的な連携のもと、産業、文化、まちづくり、学術の分野等において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的とする。

(協力事項) 第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1)産業振興に関する協力 (2)地域文化の育成・発展に関する協力 (3)まちづくりに関する協力
(4)人材育成に関する協力 (5)学術に関する協力 (6)その他必要と認める事項

平成24-26 年度

本学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、観光による地域産業の活性化、交流人口の増加を目指して本学学生と地元住民(今金町人流創生プロジェクト協議会)が協力し、今金町の魅力を探り、その魅力を町外に発信する「地域資源発掘・再発見事業」、や「田舎暮らし体験事業」をはじめ、外国人留学生をモニターとしてインバウンドの可能性について検証する「外国人留学生による今金インバウンドモニターツアー」、冬季の旅行商品開発のための「冬の今金モニターツアー」などのプロジェクトに取り組んできた。

■ 札幌国際大学生と今金町の若者による“シャベリ場”「今金を語ろう」

ワークショップをととして、地元住民(若者)が感じている今金の魅力を大学生に伝え、次回のフィールドワークの参考とすることを目的として、今金町民センターで開催した。

■ 札幌国際大学生受入事業報告 札幌国際大学今金研修 ～今金を探ろう！～

今金町の魅力・地域資源発掘・再発見を目的に、前回の冬に実施した体験プログラムをベースに企画した旅行プログラムを、実際に学生自身が体験し評価・提言を行った。

平成27 年度 奨励共同研究(特別教育プロジェクト)

フットパスの可能性に関する研究 ―今金町を中心に―

地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町をフィールドとして、フットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行った。

平成28(2016)年度 奨励研究

地域資源を活用したまちづくりに関する研究 ―今金町フットパスの活用方策について―

前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、成果と課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討する。

平成29(2017)年度 奨励研究

学科の学びを活用する能動的学修の展開 ～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

今金町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと協議し、提案する。学科の学習を生かすことができるように、キーワードとリンクする学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる。こうした活動により、学内での学びを生かした学外での能動的学修(アクティブ・ラーニング)展開の方法についての資料を得ることを目的とする。

平成30(2018)年度 奨励研究

住民との協働による能動的学修の展開 ～今金町美利河地区をフィールドとしたプロジェクト学習の推進～

昨年度、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を同町の中学生や町民と協議し、提案を行った。今年度は、提案内容(プロジェクト)を現実のものとするための情報収集、試行検証を重ねる。こうした課題設定、計画立案、実施、反省・評価の一連の過程を通して、プロジェクト学習の教育効果や推進のための資料を得ることを目的とする。

令和元(2019)年度 奨励研究

連携自治体におけるインターンシップの可能性について～課題設定と評価方法を中心に～

本研究は、課題解決型「インターンシップB」の実施について、本学と地域連携協定を結ぶ自治体における活動の可能性を検証する。本学では、現在道内7つの市町村と連携協定を結んでいるが、平成24年(2012)度の協定締結後、多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題設定、活動内容、評価方法等の資料を得ることを目的とする。

令和2(2020)年度 奨励研究

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究 ～リーダー育成モデルプログラムの検討～

地域課題の解決に焦点を当て、リーダー育成モデルプログラムを検討し、新カリキュラム作成の資料等を得ることを目的として実施する。特に、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康をテーマに、健康の維持及び介護予防の観点から、解決方策の検討に取り組む。

令和3(2021)年度 奨励研究

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究Ⅱ ～連携自治体におけるリーダー育成プログラムの検討～

地域課題テーマに、前年度実施できなかった現地での実践的な活動を中心に据え、学生自らが解決方策の企画・実施等を通して、リーダー育成や新カリキュラムの展開における資料等を得ることを目的として実施する。今金町の主要地域課題である健康をテーマとして、前年度の成果物の活用方策をはじめ、子供から高齢者までの健康増進事業の企画・実施等を行う。さらに、観光学部の学生参画によって、地域観光振興という地域課題へのアプローチも行なう。

令和4(2022)年度 奨励研究

大学発スポーツクラブのアウトリーチに関する実証的研究

本年「SIU スポーツクラブ」が本格的にスタートした。一方、本学と地域連携協定を締結する今金町は、農業が盛んで、地域資源に恵まれた自治体であるが、人口減少や少子高齢化の進展による地域課題が山積している。とりわけ、町民の健康の維持・増進は重要な課題となっており、健康のためのスポーツ等の活動機会の拡充が求められる。そこで、今金町をフィールドとして、地域課題の解決に向けて、大学が有する資源であるスポーツクラブ事業をアウトリーチすることによって、その効果と課題を検討する。

令和 4(2022)年度 札幌国際大学 奨励研究
大学発スポーツクラブのアウトリーチに関する実証的研究

調査研究報告書

令和 5 年 3 月

札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目 4-1

TEL 011-881-8844(代表)

2022 年度（令和 4 年度）札幌国際大学 地域・産学連携センター共同研究
一般社団法人北海道商工会議所連合会と人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書
～卒業後の職業観「なぜ我々は働くのか」についての研究～

統括：平塚彰（キャリア支援センター長）

協力：キャリア形成論担当教員

椿明美、原一将、新谷弥、樋原智恵

1. 研究テーマ

入学後約 9 カ月経過した本学 1 年次の学生が、卒業後の職業観についてどのような意識を持っているのかを調査、研究する。1 年次の必修科目「キャリア形成論」の授業を活用し、職業観を醸成する講義、及び学外の企業経営者をファシリテータとするグループディスカッションの前後において、「我々はなぜ働くのか？」という問いをアンケート調査により行い、講義、グループディスカッションを経て、本学 1 年生の職業観に関する意識が、どのように変化したかを調査、研究し今後のキャリア教育における示唆を得ようとするもの。

2. 背景

（1）就職 3 年後離職率

いま全国の大学では 3 年 3 割（表 1）、すなわち就職後 3 年以内に 3 割の新卒社員が辞めてしまう状況のなかで、学生に対しどのように「働くことの意味」を伝えるかが大きな課題となっている。

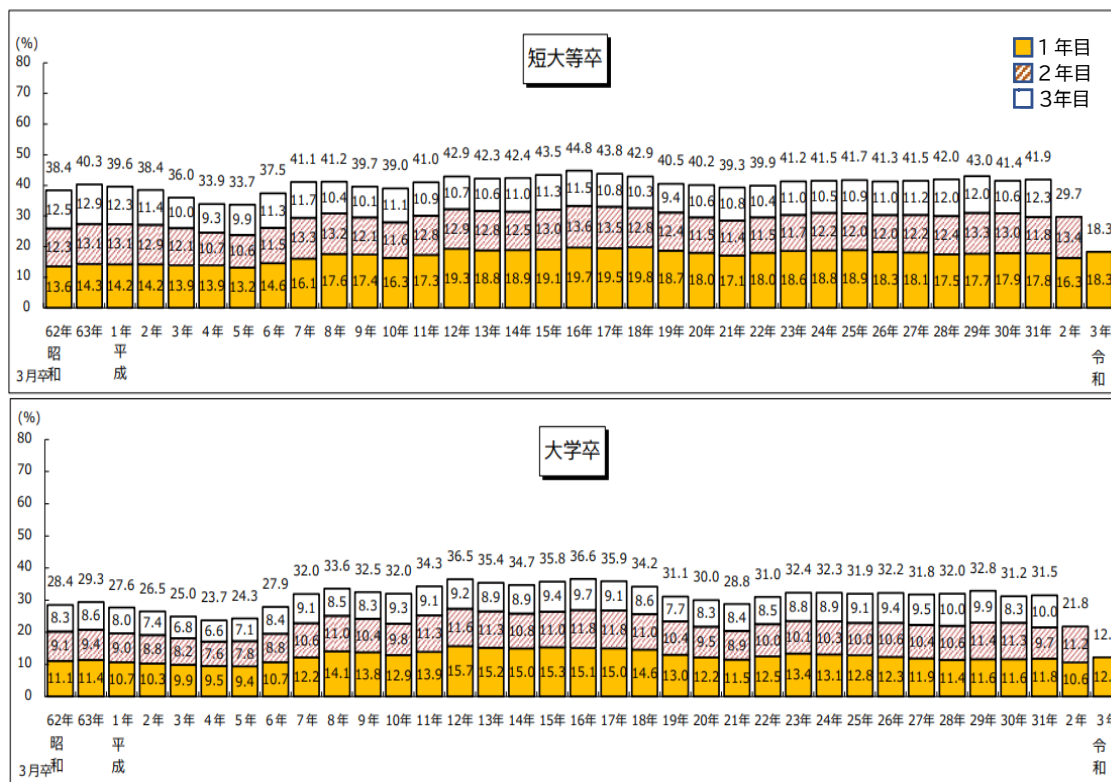
誰しも学生時代に「夢」を描く。しかし自由な学生生活も終わりに近づき、就職という時期に直面する時、その「夢」を追い続けるのか。それとも「現実」の道を選ぶのか選択を迫られる。その夢が大きければ大きいほど深い挫折感を味わうことになる。全く挫折感を感じることなく満足して就職していく学生も多数いる。しかし、こうした幸せな学生にとっても必ず挫折感はやってくる。希望に燃えて入社したはずの会社で、就職前には想像していなかった現実の厳しさが見えてくる。その会社でやりたかった仕事がやらせてもらえず、やりたくない仕事をやらされることもある。またやりたかった仕事をやらせてもらえても、思ったようには仕事が進まないこともある。

こう考えると就職して実社会で働くということは、多くの場合、夢が破れるということであり、志した目標が挫折するということとも言えるかもしれない。そして夢破れ、目標を失ったとき我々の心に浮かぶのは、「なぜ我々は働くのか」、この問いではなかろうか。

もちろんこの問いに対して、「給料のため、生活のため」という答えはある。しかしこの答えに納得する人は、そう多くはないのではないか。

就職後3年以内離職率の推移

(表1)



出典：厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/content/11652000/000845829.pdf>

(2) 勤労観、職業観の醸成

就職活動の面談指導などで、日々学生と接し痛感するのは職業観の希薄さである。子ども・若者については、働くことへの関心・意欲・態度、目的意識、責任感、意志等の未熟さや、コミュニケーション能力、対人関係能力、基本的マナー等、職業人としての基本的な能力の低下、職業意識・職業観の未熟さなどが多く指摘されている（中央教育審議会、以下中教審、2011¹）。キャリア教育を進めていく上で、特に重要視すべきは1年次、2年次の早期に職業観を醸成することであり、3年次に就職という時期に直面する時、希望に燃えて入社したはずの会社で現実の厳しさに出くわした時、希望通りの仕事に就けても、思うように仕事が進まない時、夢破れ挫折した時に対処していくため、学生時代に職業観について十分考える機会をつくる必要がある。就職して働く中で漂流しないために大切にする価値観、欲求、能力、いわば人生の錨・キャリア・アンカーをしっかりとっておく必要がある。

本研究ではキャリア教育を進めていく上で重要な「働くことの意味」について1年次授業を活用し、講義、及び外部のファシリテータによるグループディスカッションの前後でアンケート調査を行い質的分析を実施した。

¹ 中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）

3. アンケート調査①

(1) 目的

入学後約9カ月経過した本学1年生が、卒業後の職業観についてどのような意識を持っているのかをアンケート調査する。本調査は1年次の必修科目である全学共通教育科目「キャリア形成論」の第10回授業において行い、「我々はなぜ働くのか?」という質問を用いて行った。

(2) 方法

- A. 調査対象者 札幌国際大学・全学共通教育科目にて1年次必修のキャリア教育科目として開講している「キャリア形成論」履修者のうち、
人文学部・国際教養学科・・・・・・・・・・55名
同 心理学部・臨床心理専攻・・・・・・42名
同 子ども心理専攻・・・・・・36名
観光学部・観光ビジネス学科・・・・・・・・・・49名
スポーツ人間学部・スポーツビジネス学科・35名
同 ・スポーツ指導学科・・・・・・77名
合計294名から回答を得た（授業出席者302名より、回収率97.3%）。

- B. 調査時期 2022年12月

- C. 調査方法

「キャリア形成論」の第10回授業「キャリア・アンカー」をテーマとする講義の開始直後において、学生に対して全く情報を与えず、白紙の状態にて「我々はなぜ働くのか?」という質問を学修管理システム respon を用い、回答は自由記入方式を採用した。

- D. 結果

自由記入の回答方式を採用した。得られた回答の意味、内容を吟味しながら分類を行った。分類は、職業観に関する先行研究（小川 2016²）において採用の6つの大分類（表2）、および21の小分類のうちの17を用いた（表3）。

アンケート調査結果①（表2）

n=294

生計の維持	個性の発揮	役割の実現	非個性化	趣味 欲しいもの	自分
82.3%	5.8%	4.4%	3.7%	1.4%	2.4%

大分類のうち生計の維持、個性の発揮、役割の実現は小川（2016）の採用した先行

²小川邦治（2016）. 大学生にとっての「働くことの意味」に関する探索的研究

研究（尾高 1995³）による職業の定義「職業とは、個性の発揮、役割の実現および生計の維持をめざす継続的な人間活動である」による。

（表 3）

大分類	小分類	アンケートの回答
生計の維持（242）	お金（106）	お金
		お金を稼ぐ など
	生活・生きる（133）	生活
		生きる
		生活の安定・充実 など
個性の発揮（17）	自立（3）	自立した生活 など
	（自己）成長（6）	自身の成長
		人生経験
		能力・スキルアップ
		社会勉強 など
	充実感・やりがい（2）	充実感・達成感
		やりがい
		仕事そのものが好き など
	自分探し・生きがい探し（4）	生きがいを見つける
		存在意義を得る
		自分探し など
役割の実現（13）	夢・目標の実現（3）	夢の実現
		自分のやりたいことの実現 など
	関わり・出会い（0）	人との出会い
	社会貢献（6）	人の役に立つ
		誰かのために
		社会 など
	家族・扶養（2）	家族
		両親 など
非個性化（11）	社会的認知（5）	社会的に認められる
		社会の一員になる
		責任・使命 など
	義務・社会が回る（8）	経済・社会
		義務
趣味・欲しいもの（3）	暇つぶし（3）	会社・上司
		暇つぶし
	趣味のため（0）	趣味のため
		好きなことをする
自分（8）	欲しいもの（3）	欲しいもの
	自分（7）	自分のため
	幸福（1）	幸福のため

³ 尾高邦雄（1995）. 職業の3要素：①生計維持（経済的側面）、②個性の発揮（個人的側面）、③社会的連帯の実現（社会的側面）

E.考察

入学後1年に満たない学生に対し、全く事前情報を提供せず、白紙の状態にて「我々はなぜ働くのか？」という質問を行い、回答を集計した結果が表2である。驚くことに8割以上が生計の維持、すなわち「お金のため」、「お金を稼ぐため」、「生活のため」、「生きるため」など、生計の維持のために働くという意識である。また充実感・やりがいなどのために働くのは5.8%、社会貢献のため、家族のためなど他人のために働くのは4.4%と極めて低い。

大分類のうち非個性化とは、小川（2016）の分類によれば、暇つぶしとして、経済・社会の要請として、あるいは義務として働くなどの回答であるが、本アンケート調査にも「暇つぶし」のために働くという回答が3件の回答があり驚きである。

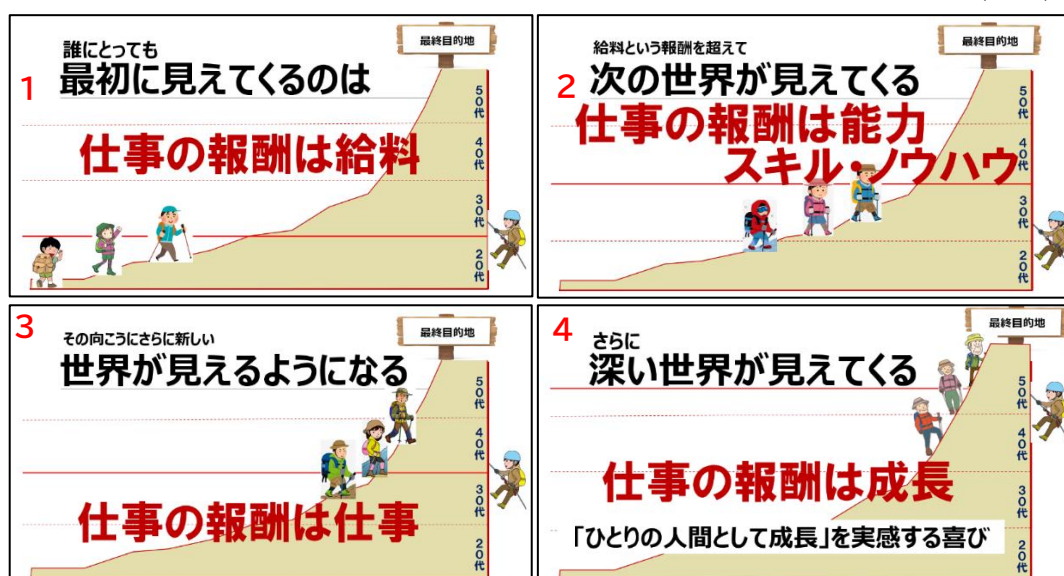
4. 講義、及びグループディスカッション

（1）「我々はなぜ働くのか？」をテーマにした90分講義

「仕事の思想」田坂広志（2012）⁴第2話「成長」をベースとして、「仕事の報酬は何か？」という問いを学生に投げかけ、仕事の報酬は「給料」、仕事の報酬は「能力・スキル・ノウハウ」、仕事の報酬は「仕事」、仕事の報酬は「人間としての成長」という内容で物語風に講義（図4）。

給料や地位は、給料を使い地位を退けば失われてしまう。能力も時間が経てば陳腐化する。やりがいのある仕事に出会うとも限らない。しかし人間としての成長だけは決して失われることはないという結論に導く講義を行った。

（図4）



⁴ 田坂広志（2012）. 仕事の思想 p40-67

(2) 道商連・青年部の企業経営者がファシリテートするグループディスカッション
 学生を7～8人のグループに分け、道商連様・青年部の23名の企業経営者が1名ずつファシリテーターとして主導しながら、テーマ「なぜ我々は働くのか」に従ってディスカッション形式に進めた。事前にファシリテーターに対して90分講義の内容をレクチャーし、働くことの意味を単に「生活の糧を得るため」だけではなく、仕事の報酬は能力(スキル・ノウハウ)、仕事の報酬はやりがいのある仕事(プロジェクト)、仕事の報酬は人間としての成長、、、など、学生を意識の高い方向に導くようファシリテーターの意識を共有した。

ディスカッションのスタートをスムーズに進めるため、「給料」と「やりがい」を座標軸の縦軸と横軸に示し(図5)、「給料」が高くて「やりがい」のある仕事が1番目(第I象限)、反対に「給料」低くて「やりがい」もない仕事は4番目(第III象限)。「給料」は高いけれど「やりがい」のない仕事(第IV象限)、と「給料」は低いけれども「やりがい」のある仕事(第II象限)どちらを2番目に選びますか、自分の意見を伝えながら自己紹介することとした。

(図5)

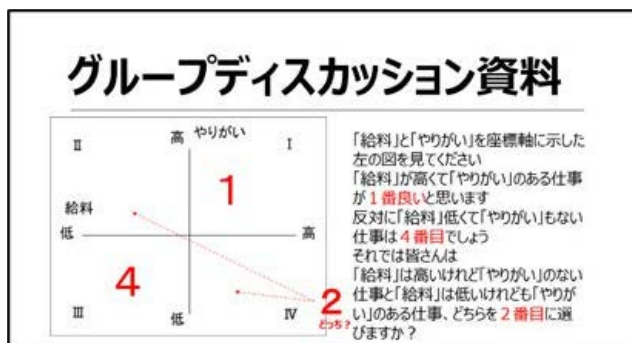
包括連携協定＝北海道商工会議所連合会

中小企業若手経営者22名との グループディスカッション

7～8人のグループを42チーム作り90分×3回

「なぜ我々は働くのか？」をテーマに

- 1.「給料」&「やりがい」座標軸(次ページ)
- 2.グループディスカッションの内容を発表



5. アンケート調査②

(1) 目的

本調査はアンケート調査①と同様に1年次の必修科目である全学共通教育科目「キャリア形成論」の第14回授業において、外部の23名の企業経営者が1名ずつファシリテーターとして主導しながら、テーマ「なぜ我々は働くのか」に従ってディスカッション形式に進めた講義終了後、卒業後の職業観についてどのように変化したかを調査するもの。

(2) 方法

- A. 調査対象者 札幌国際大学・全学共通教育科目にて1年次必修のキャリア教育科目として開講している「キャリア形成論」履修者のうち、
人文学部・国際教養学科・・・・・・・・・・61名
同 心理学科・臨床心理専攻・・・・・・・・29名
観光学部・観光ビジネス学科・・・・・・・・24名
スポーツ人間学部・スポーツビジネス学科・・・20名
同 スポーツ指導学科・・・・・・・・55名
合計189名から回答を得た（授業出席者235名より、回収率80.4%）。

B. 調査時期 2023年1月

C. 調査方法

テーマ「なぜ我々は働くのか」に従ってディスカッション形式を進めた後、学修管理システム respon を用い、回答は自由記入方式を採用した。

D. 結果

自由記入の回答方式を採用した。得られた回答の意味、内容を吟味しながら分類を行った。分類は、アンケート調査①と同様に、職業観に関する先行研究(小川 2016⁵)において採用の6つの大分類(表6)、21の小分類のうちの17を用いた(表7)。

アンケート調査結果②(表6)

n=189

生計の維持	個性の発揮	役割の実現	非個性化	趣味 欲しいもの	自分
53.4%	29.1%	11.1%	0.5%	0.5%	5.3%

E. 考察

テーマ「なぜ我々は働くのか」に従って外部のファシリテータによる約40分のグループディスカッションの後、アンケート調査②を行った結果が表6である。ディスカッションにおいて、「給料」と「やりがい」を座標軸の縦軸と横軸に示して自己紹介のツールとしたこともあり(表5)、アンケート調査②の結果は①と比較して大きな変化が見られる。①では8割以上が生計の維持、すなわち「お金のため」、「お金を稼ぐため」、「生活のため」、「生きるため」など、生計の維持のために働くという意識であったが、②では生計の維持が5割程度にまで激減、かわって個性の発揮、すなわち(自己)成長、充実感・やりがい、などが3割程度にまで上昇して

⁵小川邦治(2016). 大学生にとっての「働くことの意味」に関する探索的研究

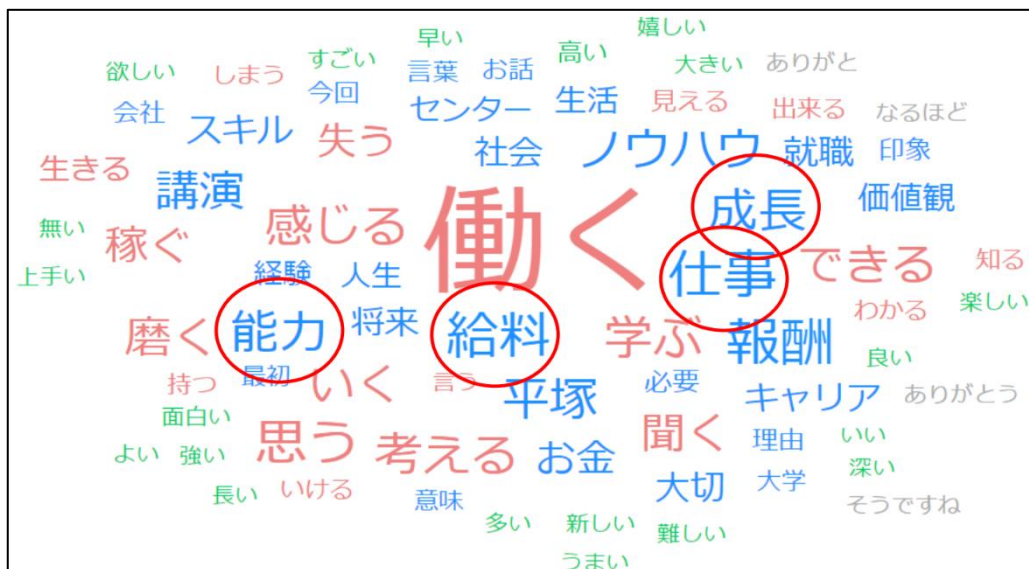
いる。特にアンケート調査①において2件の回答であった「充実感・やりがい」が、アンケート調査②においては31件の回答に増加している（表7）。

（表7）

大分類	小分類	アンケートの回答
生計の維持（１０１）	お金（５１）	お金 お金を稼ぐ など
	生活・生きる（５０）	生活
		生きる
		生活の安定・充実 など
	自立（０）	自立した生活 など
個性の発揮（５５）	（自己）成長（１５）	自身の成長
		人生経験
		能力・スキルアップ
		社会勉強 など
	充実感・やりがい（３１）	充実感・達成感
		やりがい 仕事そのものが好き など
	自分探し・生きがい探し（４）	生きがいを見つける 存在意義を得る 自分探し など
夢・目標の実現（３）		夢の実現 自分のやりたいことの実現 など
	関わり・出会い（２）	人との出会い
役割の実現（２１）	社会貢献（３）	人の役に立つ
		誰かのために
		社会 など
	家族・扶養（１２）	家族
両親 など		
社会的認知（６）	社会的に認められる	
	社会の一員になる	
	責任・使命 など	
非個性化（１）	義務・社会が回る（０）	経済・社会
		義務
		会社・上司
	暇つぶし（１）	暇つぶし
趣味・欲しいもの（１）	趣味のため（０）	趣味のため 好きなことをする
	欲しいもの（１）	欲しいもの
自分（１０）	自分（４）	自分のため
	幸福（６）	幸福のため

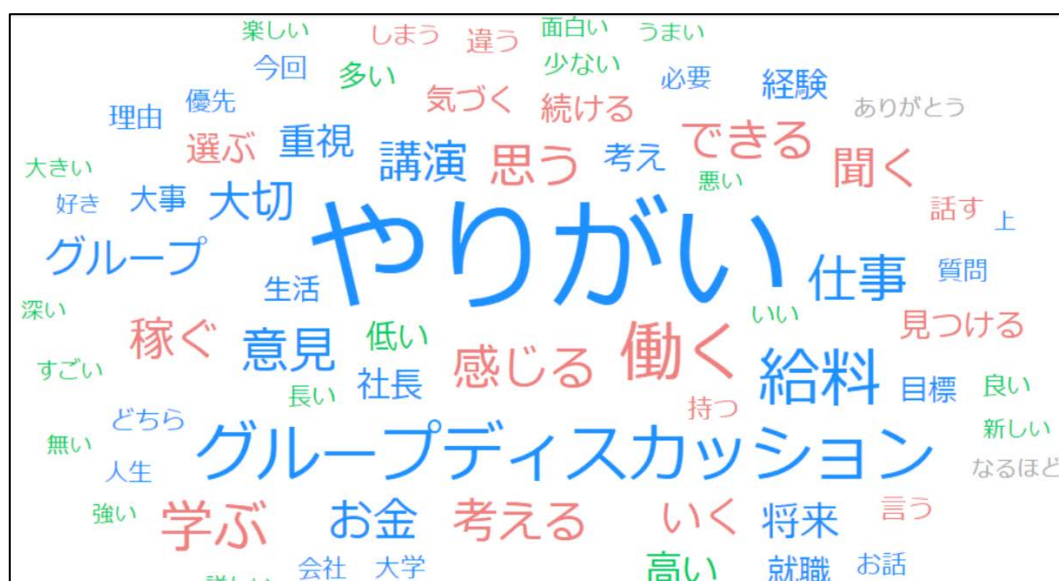
6. 授業感想文のテキストマイニング結果 (<https://textmining.userlocal.jp/>)

- (1) 1年生の必修科目「キャリア形成論」の授業を活用し、職業観を醸成する講義講義感想文のテキストマイニング (図8)



「仕事の報酬は何か？」という問いを学生に投げかけ、仕事の報酬は「給料」、仕事の報酬は「能力・スキル・ノウハウ」、仕事の報酬は「仕事」、仕事の報酬は「人間としての成長」という内容で講師の体験談、物語風に行った講義感想文の結果が図8である。「働く」というキーワードに続き、仕事の報酬として、給料⇒能力⇒仕事⇒成長と、しっかり認識されている。

- (2) 1年生の必修科目「キャリア形成論」の授業を活用し、職業観を醸成するための外部の企業経営者をファシリテータとするグループディスカッション講義感想文のテキストマイニング (図9)



7. 総合考察

働くことは広い意味で捉えると、人が果たす様々な役割の中で、「自分の力を発揮して社会（あるいはそれを構成する個人や集団）に貢献すること」と考えることができる。それは家庭生活の中での役割や、地域の中で市民として社会参加する役割等も含まれている（中教審 2011⁶）。大学教育においてキャリア教育の必要性は高まっており、特に本研究のテーマとして掲げた職業観に関する意識、職業観の醸成は、キャリア教育の持つ重要な着眼点である。

本研究において1年次の学生に対し、「我々はなぜ働くのか？」の質問を行い、アンケート調査①では全く情報を与えず白紙の状態、またアンケート調査②においては、キャリア・アンカーをテーマにした90分の講義、および外部の企業経営者をファシリテータとする同テーマでのグループディスカッション終了後に、「我々はなぜ働くのか？」の問いを再度行い、結果について比較し検証した。そして大学初年次においては、働くことが、お金のため、生活のため、生きるためなど「生活の維持」の意識が非常に強いことが示唆された。

8. 今後の方向性

本研究は、アンケート調査、講義感想文をもとにして学生の意識変化を検証する質的研究であるが、アンケート調査①の後に、キャリア・アンカーをテーマとする講義、そして企業経営者をファシリテータとするグループ・ディスカッションを経て、アンケート調査②を行っている。この2つのアンケート調査の間隔が約1カ月と短期間のうちに行われているため、これを含めて今後は次の方向で研究を進めていくことが望まれる。

1つ目は、1年次「キャリア形成論」の第3回、第4回など早い時期にキャリア・アンカーなど「働くことの意味」をテーマとする講義を行い、同様のテーマの講義を数回経た上で再度アンケート調査を行うことである。一定期間をおいて講義、グループディスカッションによる意識変化をみる。

2つ目は、講義感想文の更なる検証である。本研究では履修学生に課題として講義感想文を課し、結果についてテキストマイニングを活用し頻度の高い単語を可視化するに止めている。この講義感想文を質的データとして吟味し、授業担当教員により学生に対する面談調査、グループインタビューなどによって逐語データを収集して検証する分析である。

3つ目は、これらの研究によって得られた結果を実践の場、キャリア教育科目として授業に活用することである。本研究により大学初年次においては「働くことの意味」を考え、理解を深める機会を提供していくことが非常に重要であることがわかった。今後は本学のキャリア教育の一環として、「働くことの意味」を軸に据え、その成果を検証していくことが必要と考える。

⁶中央教育審議会（2011）. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）

**2022 年度(令和 4 年度) 札幌国際大学 地域・産学連携センター共同事業
清田区、北海道コカ・コーラボトリング㈱との協働による「清田区オリジナルモクテルレシピ開発」
報告書 ～「ゼミ学生による地元の魅力発信のための地域貢献型モクテルの開発」～**

1. 事業の背景-本連携協定

令和 4 年(2022 年)8 月、札幌市清田区にある北海道コカ・コーラボトリング㈱(以下、「コカ・コーラ社」という。)と札幌国際大学(以下、「大学」という。)は、産学の連携を通じて相互の発展に寄与するとともに、札幌市清田区の地域創生や社会課題解決に取り組むため、包括連携協定を締結した。コカ・コーラ社と大学は、これまでも YOSAKOI チーム「コカ・コーラ札幌国際大学」の運営や、地域の高齢者宅の除雪ボランティアを共同で行うなど、連携事業を実施してきたが、産学連携協定を新たに締結することにより、相互協力のもと、清田区の地域発展及び課題解決に努めることを目的としている。初年次の試みとして、札幌市清田区の地域創生に向けた「清田区オリジナル¹モクテル」レシピの開発について、大学生とともに取り組んだ。

2. PBL (Problem-based Learning) 型授業によるレシピ開発

PBL 型とは、問題解決型とも呼ばれ、学生が主体的に調べ、考え、議論し、問題を解決していくという学習方法である。3 年次にコロナ禍における「フード・ツーリズム」を研究してきた 4 年ゼミ生(17 名)が中心となり、レシピ開発に取り組むこととなった。そのきっかけとなったのは、コロナウイルス収束後の地元志向の高まりであるが、一方で、地元志向と言いながら、観光地以外は地元の魅力発信が不十分であることを痛感したことが大きい。地域貢献というキーワードのもと、1 年をかけてレシピ開発を行った。

3. 実際のゼミ活動(開発までの流れ)

半期各 15 回、計 30 回のゼミの時間を使い、概ね以下の手順で実施した。

- 1) PBL 型研究への理解、学生の果たす役割
- 2) 清田区理解のための調査(資料)、市販モクテルの調査
- 3) 清田区理解のための調査(現地)、市販モクテルの調査
- 4) 清田区及びモクテルについて SWOT 分析、資料作成
- 5) 企業担当者の説明(企業活動、レシピ作成コンセプト)、2 年学生も参加
- 6) レシピ制作に向けた前提条件の再確認(ゼミ内コンセンサスの形成)
- 7) チーム分け、チームリーダー主導による役割分担
- 8) 実施計画書の作成、関係者との擦り合わせ
- 9) 資材調達(地域内で活用できる物品・商品の確認・試食)
- 10) 試作品開発(調理室実習)
- 11) 試作品開発(調理実習室)
- 12) 地域貢献性の再検討と修正、方向性とネーミング
- 13) 提案品の絞り込み(企業との協議、インタビュー)
- 14) 7 月 30 日、大学オープン・キャンパスにて、ニーズ調査(シール投票)

¹ モクテルとは、似せた、真似たという意味の「mock(モック)」と「cocktail(カクテル)」を合わせた造語で、ノンアルコールカクテルの新しい呼び方

実施準備、当日オペレーション、資料作成等の分担

- 15) オープンキャンパス結果まとめ、振り返り
- 16) コカ・コーラ社担当部署との意見交換会（試飲）
- 17) 意見交換に基づく改善、最終候補の提案、採水地の白旗山フィールドワーク参加
- 18) マーケティング手法に基づく試作品とターゲットのマッチング、イメージの共有化
- 19) 試飲・意見交換会準備
- 20) 試飲・意見交換会準備、学内関係者への周知、広報
- 21) 10月25日、大学にて試飲・意見交換会実施（札幌国際大学、北海道コカ・コーラボトリング、清田区共催）
- 22) 関係者意見交換振り返り、意見に対する学生の対案
- 23) 意見交換に基づく改善、最終候補の決定、関係者との協議
- 24) 試作品開発（最終）
- 25) 最終発表会の準備、関係部署との打合せ
- 26) 最終発表会の準備、当日オペレーションの確認
- 27) 資料作成、当日の役割分担
- 28) 12月12日、大学にて「清田区オリジナルモクテル」完成お披露目会（札幌国際大学、北海道コカ・コーラボトリング、清田区共催）
- 29) 完成お披露目会振り返り、PBL型授業を通じた自己成長振り返り、今後の展開に対する意見
- 30) 4年ゼミ合同発表会にて、1年間の活動を発表、今後の展開は後輩達へ

レシピの開発が就職活動時期と重なり、やや大変な状況であったが、ゼミ生全員で相互に補い、レシピの開発から最終プレゼンテーションまでを完遂した。

4. 清田区オリジナルモクテル「白旗山の雪」の完成

5月から考案をはじめ、10月の「試作品意見交換会」を経て、12月に清田区オリジナルモクテル「白旗山の雪」が完成した。主な使用材料は、清涼飲料（アンバサ・サワーホワイト）、バタフライピー、バニラアイスクリーム、レモンである。地域をイメージさせる特徴を持ちつつ、非常にシンプルで清涼感のある仕上がりとなった。試作段階において、留学生在が提案したバタフライピーは、近年、日本国内でも注目され始めているハーブであり、美しい水色が特徴である。レモンを加えると、水色から紫色に色が変わるという点も、視覚的な遊び心を求める若者らしい発想から生まれた。また、モクテルのネーミングには、北海道コカ・コーラボトリング（株）札幌工場の採水地である白旗山を使用した。このネーミングが持つ清らかなイメージが北海道の自然及び清田区を想起させることなどから、審査員や学生の多数の賛同を得て、選定に至ったものである。

5. 今後の展開について（予定）

今後、地域の魅力を発信するツールのひとつとして、さまざまな機会を捉えて、レシピの周知、イベントや店舗での販売及び活用を視野に入れ、発展させたい。そのために、北海道コカ・コーラボトリング（株）、清田区、札幌国際大学との連携をさらに強化するとともに、大学内での連携も強化していく予定である。



10月25日 試作品・意見交換会(記者発表)



12月12日 完成お披露目会(記者発表)



北海道コカ・コーラボトリング(株)説明会・インタビュー・意見交換



札幌国際大学オープン・キャンパス シール投票



モクテル試作品



試作の様子



完成お披露目会の様子

Kiyotaku Original Mocktail

Recipes

~Butterfly pea & Ambasa Sour White~

〈材料〉

- ・バタフライピー 50ml
- ・アンバサ 100ml
- ・バニラアイス お好みの量
- ・輪切りレモン 1枚
- ・氷 適量

- ① 予め、バタフライピー・ティーを作り冷ましておく
- ② 用意したグラスにバタフライピー・ティーを注ぐ
- ③ アンバサソーワートホワイトを注ぎ、少し泡立てる
- ④ 氷を浮かべる
- ※ 氷を入れないとアイスが浮かびません
- ⑤ バニラアイスをのせる
- ⑥ 輪切りレモンを添えて完成

総括：金庭香理（札幌国際大学観光学部国際観光学科）
 北海道コカ・コーラボトリング（株） 広報・サステナビリティ推進課
 札幌市清田区市民部地域振興課まちづくり調整担当係

2022 年度(令和 4 年度) 札幌国際大学 地域・産学連携センター共同事業
札幌市国際部交流課との連携「留学生による外国人支援プロジェクト」官学連携報告書
—札幌市在住外国人を対象とした日本語力調査実施への協力及び札幌市やさしい日本語ガイドライン
作成に向けた準備—

1. 事業の背景-本連携協定

令和4年(2022 年)3月、札幌国際大学、札幌国際大学短期大学部、札幌市、公益財団法人札幌国際プラザの4者が、日本人も外国人も誰もが住みやすいまちの実現を目的に札幌市の国際化推進等に関する連携協定を締結した。

近年、札幌市では年間約 1,000 人のペースで外国人市民が増えている。ここ数年は新型コロナウイルス感染症の影響で減少傾向であったが、新型コロナウイルスの水際対策緩和後は再び増加に転じており、出身国や地域なども多様化が進んでいる。また、人口減少や少子高齢化が進行する中、外国人市民は地域社会の重要な構成員であり、日本人も含めた市民全体が互いを理解しあい、共に生きていける社会の実現が急務となっている。このことから、札幌市・札幌国際プラザと、国際教育や地域課題の解決に力を入れている札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部が協力し、未来に向けたまちづくりに取り組むこととなった。

初年度(2022)は、今後ますます増加が見込まれる外国人にもわかりやすい情報提供を行うため、札幌市・札幌国際プラザ(以下、「市」と呼ぶ。)と札幌国際大学(以下、「大学」と呼ぶ。)が協力のもと、外国人市民の日本語力調査、やさしい日本語ガイドラインの作成に取り組んだ。

2. 外国人市民の日本語力調査の実施

多文化共生社会に向けた街づくりの推進や情報発信の方法を検討するうえでの基礎資料とするため、外国人住民の日本語力の調査を以下の手順で実施した。

1) 調査票の作成(市・大学)

大学に在籍する留学生 5 名(国籍:ネパール、中国、マレーシア、ベトナム、韓国)に協力を仰ぎ、可能な限り、平易な日本語で質問文を作成した。

2) 質問票の翻訳(市)

日本語版をもとに、英語、中国語、韓国語、ベトナム語版の5種類を用意した。公用語ベースで在住外国人の約 7 割に対応できると推察したうえで、言語を選定した。

3) 調査の実施(市・大学)

インターネットによる調査方法で実施した。周知に当たり、大学では、在籍留学生にメールで調査の実施について呼びかけた。市では、ホームページ等での案内のほか、札幌市内に住んでいる 18 歳以上の外国人市民の中から、無作為で 5,000 人を選び周知文書を郵送した。また、外国人が立ち寄る窓口等でも周知を行ったほか、外国人コミュニティにも協力を呼び掛けた。

4) 調査の回収(市)

令和4年4月1日～令和4年 14 日までの 2 週間実施し、1,456 件(外国人住民の約 11%)の回答を得た。(日本語 580、英語 453、中国語 219、韓国語 70、ベトナム語 134)

5) データの集計・分析(市・大学)

回収したデータについて、国籍・在留資格・在住年数と日本語レベルの相関、日本語レベルの特徴といった視点から分析を行なった。また、自由解答欄から、生活面におけるニーズを把握した。(詳細結果は札幌市

報告書を参照)

6) やさしい日本語ガイドライン作成に向けて(大学)

今後、札幌市やさしい日本語ガイドラインを作成するため、当該調査の結果から見る札幌市在住外国人の特徴を以下にまとめた。

札幌市内に住む外国人は 2022 年 10 月 1 日現在で、全市民の約 0.8% に達し、市内各区に分散している。出身国や地域別に見ると、ベトナム、中国の人口増加数が伸びているものの、世界のさまざまな国や地域の居住者が存在する。国籍、言語も多様であり、多言語対応は難しい状況にあるため、共通言語としての日本語での対応が必要であると思われる。

外国人に対して日本語での情報発信を考える場合、まずふりがなをつけるという方法が検討されがちである。当該アンケートでも「公的な書類を外国人に送る場合には、書類にふりがなをつけてほしい」という意見や、「ふりがながあれば、ふりがなを頼りにインターネットで漢字の意味を調べることができる」という意見が寄せられた。さらに、「郵便物としてではなくメールで送ってもらえれば、ネット等を用いて自分で翻訳することが容易である」という意見も見られた。確かに、ふりがなをつけることも有効な方法ではあるが、難しい言葉にふりがなをつけるだけでは解決にならない場合もあることも明らかになった。たとえば、「納税」という漢字に「のうぜい」というふりがなをつけても、語彙自体が難しいため理解が難しいということである。このような場合、「税金を払うこと」など平易な日本語への言い換えを行ったあと、ふりがなをつけ理解しやすくするような段階的な方法が必要となる。そのためには、行政現場等における「やさしい日本語」の運用が求められる。

また、アンケート結果では、多言語対応を望む意見も多いことがわかった。しかしながら、市内には約 130 か国からの外国人が生活しており、全ての言語に対応することは難しい。居住者数が多い国の言語について、優先的に多言語対応を検討する必要がある。

このように、多言語対応と「やさしい日本語」とを併用しながら外国人とコミュニケーションを図ることが、住みやすいまちづくりの第一歩となると思われる。「やさしい日本語」の使用は全国的に広がりを見せているが、地域の特性によって、必要項目に違いが見られる。札幌市において、「やさしい日本語」を使って何を作成するのか、対象を絞る必要があるのではないか。アンケート結果では「税金・年金・保険」に関する書類の言葉がわからないという意見が複数寄せられた。また、「初めて札幌に住む人に対して基本的な情報を提供してほしい」という要望もあった。このように、外国人が最も不安なのは、転入届、健康保険、年金など、札幌到着時における区役所などでの手続きであることが伺える。さらに、生活の基本的な情報を求める声もあった。こうしたニーズに応えるために、「やさしい日本語」による生活ルールのパフレットなどの作成も求められる。

また、在留資格によって外国人住民の日本語力に差があることも明らかになっている。近年増加している「技能実習」の外国人などは、さまざまな企業で働いている。そのため、日本語を勉強する時間が確保できないことがアンケート結果から明らかになっている。一方、絵がある簡単な指示や情報はわかるという回答が多いことから、やさしい日本語表現に加え、視覚的に情報伝達を行う工夫も必要であろう。

「やさしい日本語」を使うことは、「易しい」日本語だけでなく「優しい」日本語を心がけることでもある。残念ながらアンケートの回答の中に「窓口の職員は日本語ができない私にとっても冷たく接し、手続きもうまくできなかった。日本語が不自由な外国人に対してもっと理解があってほしい。」という意見があった。行政機関には、決められた言葉遣い(役所言葉)があるが、外国人住民が増加する社会においては、その基準を見直していくことも必要である。そのためには、公的機関や企業などが「やさしい日本語」を使った情報発信の重要性を理解し、やさしい日本語の作り方を学び、外国人とのコミュニケーションツールとして活用することが、住

みやすい札幌市を作るひとつのきっかけになると考えられる。そのための指針となる「やさしい日本語ガイドライン」の作成が求められるものである。

3. やさしい日本語ガイドラインの作成

当初は 2022 年度内の作成を目指していたが、諸事情により、2023 年度に持ち越しとなった。

やさしい日本語ガイドラインを作成するに当たって、大学に在籍する留学生 7 名（国籍：韓国、中国、ベトナム、マレーシア）からなるサポートチームをつくり、やさしい日本語への理解を深めてもらった。また、¹出入国在留管理庁（2023・2022）が作成する「生活・就労ガイドブック（各言語版）」を読み、外国人生活者として必要な項目などを確認してもらった。その結果、市役所の窓口で行う手続き（年金・保険・水道など）については、日本語レベルが高い学生であっても簡単ではないということが明らかになった。

このような留学生の意見や外国人市民の日本語力調査結果に基づき、「やさしい日本語ガイドライン」を市とともに作成し、今後の活用方法や「やさしい日本語」の普及などについて検討いく。

総括：金庭香理（札幌国際大学観光学部国際観光学科）

細野弥恵（札幌国際大学観光学部国際観光学科）

宇留野健太（札幌国際大学人文学部現代文化学科）

太田真司（札幌市総務局国際部交流課国際交流担当係）

※所属は 2023（令和 5）年 3 月 31 日現在

¹ https://www.moj.go.jp/isa/guidebook_all.html

札幌国際大学地域・産学連携センター年報 第 7 号

2023(令和5年)年6月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター
発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370
